

ポー・カレン語におけるビルマ語由来の借用語と原語の音韻対応

加藤昌彦

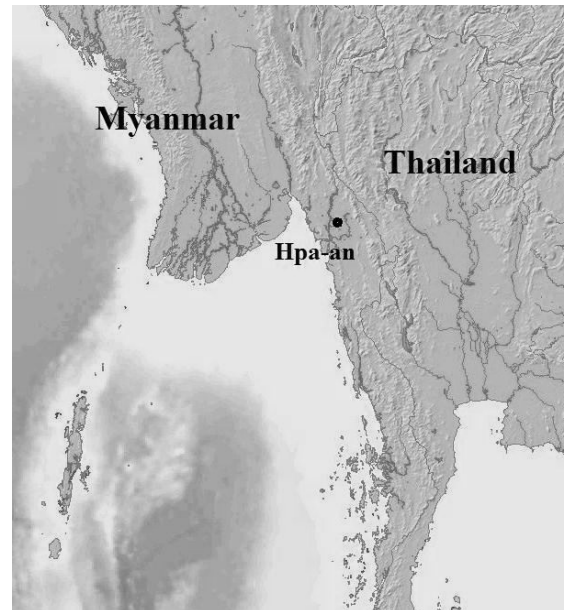
慶應義塾大学 atsuhiko@icl.keio.ac.jp

キーワード：ポー・カレン語、ビルマ語、借用語、音韻論

1 はじめに

ポー・カレン語(Pwo Karen)は、チベット・ビルマ(Tibeto-Burman)諸語のカレン語群(Karenic)に属する言語である。カレン語群の言語は SVO の基本語順を持ち、その点で、SOV 型言語が圧倒的多数を占めるチベット・ビルマ諸語の標準的タイプから逸脱している。当然のことながら、ポー・カレン語も SVO の基本語順を持つ言語である。カレン系諸言語に共通する特徴については Kato (2021a)を、ポー・カレン語そのものの概要については Kato (2019a)を参照していただきたい。ここでポー・カレン語をごく簡単に類型論的観点から見ておくと、①音節声調を持つ孤立語的言語であり、②語類は名詞・動詞・副詞・助詞・感嘆詞の 5 類であり、③時制はなく、④前置詞(=側置助詞)を用い、⑤名詞句を構成する基本的要素の順序は「所有者+名詞+状態動詞(=いわゆる形容詞)+数量句+指示語」であり、⑥名詞に対する関係節の位置には前置型および後置型が存在し、⑦対句法(parallelism; elaborate expressions)を多用し、⑧動詞連続(名詞の介在を許すものとそうでないものがある)を持ち、⑨比較表現における基本的要素の順序は「状態動詞+マーカ+比較基準」である、といった特徴を持つ言語であると言える。

本稿で扱うポー・カレン語は、ミャンマー連邦共和国(Republic of the Union of Myanmar)カレン州(Karen State あるいは Kayin State)の州都パアン(Hpa-an)周辺で話される言語である(上掲の地図参照)。以降、断りなくポー・カレン語と呼ぶときには、この言語を指すものとする。この方言は、ポー・カレン語に少なくとも四つある方言群(西部ポー・カレン語、トークリバン[Htoklibang]・ポー・カレン語、東部ポー・カレン語、北部ポー・カレン語)のうち東部ポー・カレン語に属す。パアンの北東 20km ほどにあるフラインボエ(Hlaingbwe)や南東 50km ほどにあるコーカレイ(Kawkaik)で話される方言も、同じパアン方言に含めることができる。



地図：パアン(Hpa-an)の位置

本稿の目的は、ポー・カレン語においてビルマ語の借用語がどのように受容されるかを音韻対応の観点から探ることである。Kato (2019b)で論じたように、東部ポー・カレン語と西部ポー・カレン語における借用語の音韻対応を見ると、ビルマ語からの語彙の借用は、この 2 言語が分岐する前にはほとんどなされなかったことが分かる。一方、モン語(Mon)からの借用は、東西ポー・カレン語の分岐どころか、ポー・カレン語とスゴー・カレン語の分岐以前から豊富に行われていた。このことは、カレン人とビルマ人の接触の歴史が、カレン人とモン人の接触の歴史に比べてはるかに新しいことを物語る。Kato (2019b)で述べたように、私は東部ポー・カレン語と西部ポー・カレン語の分岐の時期を 17 世紀と推定している。現在、東西ポー・カレン語に見られるビルマ語起源の借用語はこれより後に受容されたものがほとんどである。しかも、これらは、ビルマ語形との音声的な近さから考えて、19 世紀以降に受容されたものがほとんどであると私は考えている。しかし、最近では、カレン語とビルマ語の二言語話者が増えていることやビルマ文化の浸透の影響もあって、東西いずれのポー・カレン語にもビルマ語からの借用語がますます増えてきている。

東西ポー・カレン語におけるビルマ語起源の借用語は、このように借用の歴史が新しいためか、元のビルマ語形との間に、音韻論的に見て整然とした対応関係が見出される。本稿では、ポー・カレン語パアン方言におけるビルマ語起源の借用語と元のビルマ語形に見られる音韻論的な対応関係を明らかにしていく。なお、本稿で取り上げるビルマ語起源の借用語は、すべて、私が収集した様々なテキストや例文に現れたものである。なるべく多くの例を挙げることに努めたが、私のデータの中にあるものをすべて提示できている保証もないので、本稿に挙げる形式は、ポー・カレン語のビルマ語由来の借用語を網羅したものではないことをお断りしておく。

以下では、まず第 2 節でビルマ語とポー・カレン語の音韻体系を示す。続く第 3 節で、頭子音、介子音、韻母、声調に分けて音韻対応を見る。第 4 節では、第 3 節で見た音韻対応をもとに、より深い考察を行う。第 5 節はまとめである。

2 ビルマ語とポー・カレン語の音韻体系

借用語の音韻対応を検討するためには、借用先と借用元の言語の音韻体系を正確に把握しておく必要がある。2.1 では、まず借用語を供給する側の言語であるビルマ語の音韻体系を示し、続く 2.2 では、受容する側の言語であるポー・カレン語の音韻体系を示す。

2.1 ビルマ語の音韻体系

ビルマ語の音韻体系について述べる。ここで扱うビルマ語は、エーヤーワディー川の中下流域周辺で主に用いられ、ミャンマーで一般的に共通語としての扱いを受けているヤンゴン・マンダレー方言である。表記は、Kato (2013)において初めて使用し、その後、加藤(2015)、Kato (2018a)、加藤(2019)などにおいても用いているものである。なお、ビルマ語形式の表記において、/sà-/ のように後にハイフンを付してあるのはすべて動詞であり、これ

らが常に後続要素として動詞文標識(/=tè/「現実法」, /=mè/「非現実法」, /=ø/「命令法」等がある)を従えることを表す。

ビルマ語の音素には、下掲のとおり、子音音素 35 個、母音音素 7 個、声調素 3 個がある。これらに加えて子音音素には、英語などの借用語にのみ現れる [f] を音素 /f/ として認定できる可能性もあるが、本稿ではこれを /ph/ の特殊な変種と捉え、音素であるとは考えない。声調素は母音記号の上に置く補助記号で表す。ここでは母音記号 a を例として用いた。

子音音素: /p/, /ṭ/, /t/, /c/, /k/, /ʔ/, /ph/, /th/, /ch/, /kh/, /b/, /ḡ/, /d/, /j/, /g/, /s/, /ɕ/, /h/, /sh/, /z/, /m/,
/n/, /ɲ/, /ŋ/, /N/, /hm/, /hn/, /hɲ/, /hŋ/, /w/, /y/, /hw/, /l/, /hl/, /r/

母音音素: /i/, /e/, /ɛ/, /a/, /ɔ/, /o/, /u/

声調素: /à/ (低平調), /á/ (高平調), /â/ (下降調)

ビルマ語の音節構造は C1(C2)V1(V2)(C3)/T と表すことができる。C1 と C2 と C3 は子音音素であり、V1 と V2 は母音音素であり、T は音節全体にかぶさる声調素である。

C1 位置に現れた子音を頭子音と呼び、/C-/ のようにハイフンを後置して表す。ここには /N/ を除くすべての子音音素が現れることができ、その音価は次のようになる。

/p-/[p], /ṭ-/[ṭ], /t-/[t], /c-/[tɕ], /k-/[k], /ʔ-/[ʔ], /ph-/[pʰ], /th-/[tʰ], /ch-/[tɕʰ], /kh-/[kʰ], /b-/[b~ḃ],
/ḡ-/[ḡ~ḡ̌], /d-/[d~ḍ], /j-/[dʒ~ḍʒ], /g-/[g~ḡ], /s-/[s], /ɕ-/[ɕ], /h-/[h], /sh-/[ʃ], /z-/[z~ḟ], /m-/[m],
/n-/[n], /ɲ-/[ɲ], /ŋ-/[ŋ], /hm-/[ṁm], /hn-/[ṁn], /hɲ-/[ṁɲ], /hŋ-/[ṁŋ], /w-/[w], /y-/[j~ǰ], /l-/[l], /r-/[r~ɽ],
/hw-/[w̥w], /hl-/[l̥l]

なお、母音に挟まれた /d-/ は [r] と発音されることがよくある。また、/s-/ に対応する有気音 /sh-/ は最大都市ヤンゴンなどの若年層で、/s-/ との区別を失いつつある。

次に、C2 位置に現れた子音を介子音と呼び、/-C-/ のようにハイフンを前後に付して表す。この位置に現れ得るのは /-w-/ と /-y-/ の二つだけであり、音価は次のとおりである。

/-w-/[w~ũ~ö], /-y-/[j~ǰ]

/-w-/ は、後に現れる母音の広狭に応じて、非常に狭めの強い [w] から広めの [ö] まで様々なものが現れる。/-y-/ は [ǰ] あるいは [j] で発音され、前舌母音の前で頻繁に [ǰ] となる傾向がある。この傾向は C1 の /y-/ にも当てはまる。

次に、「V1(V2)(C3)」の部分を韻母と呼び、/-VVC/ のようにハイフンを前置して表す。ここには、音節末子音 C3 の現れない開音節韻母、C3 として鼻音音素 /N/ の現れた鼻音化韻母、C3 として /ʔ/ の現れた促音化韻母、の 3 種類がある。

まず、開音節韻母の種類と各韻母の音価は次のとおりである。開音節韻母には V1 のみが現れる。

/-i/[i], /-e/[e], /-ε/[ε], /-a/[ä], /-ɔ/[ɔ], /-o/[o], /-u/[u]

次に、鼻音化韻母の種類と各韻母の音価は下掲のとおりである。鼻音化韻母には V2 が現れ得る。音節末の C3 として現れる /N/ は口蓋垂鼻音として実現される場合と、前の母音を鼻母音化する要素として働く場合とがある。

/-iN/[iN~ĩ], /-eiN/[eiN~eĩ], /-aiN/[aiN~aĩ], /-aN/[aN~ã], /-auN/[auN~aũ], /-ouN/[ouN ~ oũ], /-uN/[uN ~ õ]

鼻音化韻母に別の音節が後続するとき、音節末の /N/ は、しばしば、後続する子音と同じ調音点の鼻音になることがよくある。したがって、例えば /khàndà/ 「身体」は、[kʰandä] や [kʰädä] 以外にも、[kʰandä] と発音されることがある(表記の煩雑化を防ぐため声調表記は省略した)。

次に、促音化韻母の種類と音価は下掲のとおりである。下で述べるように、促音化韻母には自動的に下降調が現れる。このうち /-εʔ/ は、加藤(2019: 21)で指摘したとおり、若い世代で /-aʔ/ に合流しつつある。

/-iʔ/[iʔ], /-eiʔ/[eiʔ], /-aiʔ/[aiʔ], /-εʔ/[εʔ], /-aʔ/[aʔ], /-auʔ/[auʔ], /-ouʔ/[ouʔ], /-uʔ/[uʔ]

促音化韻母に別の音節が後続するとき、音節末の /ʔ/ は、しばしば、後続する子音に同化し、その子音を長音化することがよくある。したがって、例えば /khiʔtā/ 「暫時」は、[kʰiʔtā] 以外にも、[kʰit:tä] と発音されることがある(声調表記は省略)。音節末の /N/ および /ʔ/ の後続子音との同化は、日本語の撥音や促音に見られる同化現象とよく似ている。

次に、声調素の調値は下掲のとおりである。下降調は喉頭化を伴うことが多い。

/à/ (低平調)[11], /á/ (高平調)[55], /â/ (下降調)[51]

ただし、これらは後に何らかの音節が続くときの発音であり、絶対語末においては、低平調と高平調が下降するピッチを伴って次のように発音される。このとき、高平調は息漏れ音(breathy voice)で発音されることがある。

/à/ (低平調)[21], /á/ (高平調)[53], /â/ (下降調)[51]

重要なこととして、これら三つの声調は音節のタイプによって現れ方が異なることを指摘しておく必要がある。開音節韻母と鼻音化韻母においては、三つの声調が自由に現れる。/sà-/ 「比べる」、/sá-/ 「食べる」、/sâ-/ 「始まる」や、/shìn-/ 「似ている」、/shín-/ 「降り

る」、/shĩn-/「積む」に見るとおりである。一方、促音化韻母においては、通常、下降調 /â/ しか現れない。促音化韻母に現れた下降ピッチを第 4 の声調と見なす研究者もいるが、私は、加藤(2006)で詳しく論じたように、これを下降調 /â/ と見なしている。ただし、基本的には促音化韻母は下降調としか共起しないので、促音化韻母の場合、声調を表記しない。例えば、「辛(から)い」を表す動詞は私の解釈では /sâʔ-/ と書くべきだが、声調表記を省略して /saʔ-/ と書く。「基本的には促音化韻母は下降調としか共起しない」と書いたのは、英語などから借用された語彙では促音化韻母が低平調と共起することがあるからである。したがって、借用語も射程に入れると、/lêʔtĩn/「ラテン語」(< 英語 Latin)と /lêʔtĩn/「(椅子の)肘掛け」(声調を表記すると /lêʔtĩn/)のように、促音化韻母を持つ音節の低平調と下降調の区別によって最小対が形成されることがある。

もうひとつ重要なことは、ビルマ語には声調素が現れず弱く発音される軽声音節があることである。軽声音節には母音 /a/ しか現れない。これを /Că/ のように表記する。例えば、/zăgá/「言葉」、/khăyû/「貝」に見るとおりである。音声的には、/-ă/ は [ǎ] あるいは [ə] として実現される。/Că/ は絶対語末には現れず、発話の際には後に何らかの音節を従える必要がある。例を挙げれば、非現実法を表す助詞 /=mè/ の弱化形 /=mă/ は 1 個の単語であるが、これだけで発音されることはなく、後に例えば疑問助詞 /=lá/ を従えた /V=mă=lá/ (V は任意の動詞)「～するか？」のような環境で現れる。

2.2 ポー・カレン語の音韻体系

次に、ポー・カレン語の音韻体系について述べる。繰り返しになるが、本稿で単にポー・カレン語と呼ぶとき、それは東部ポー・カレン語の中のパアン方言を指している。本稿で用いるポー・カレン語の表記は、2019 年に出版した Kato (2019a, 2019b, 2019c)以降に用いているものである。表記と音声実現についての詳細は Kato (2021b)を見られたい。

ポー・カレン語の音素には、下掲のとおり、子音音素 26 個、母音音素 11 個、声調素 4 個がある。声調素は母音の上の補助記号によって表すが、ここでも a を用いて示した。

子音音素: /p/, /θ/, /t/, /c/, /k/, /ʔ/, /ph/, /th/, /ch/, /kh/, /b/, /d/, /ɕ/, /x/, /h/, /ɣ/, /ʁ/, /m/, /n/, /ɲ/, /ŋ/, /ɳ/, /w/, /j/, /l/, /r/

母音音素: /i/, /ĩ/, /u/, /ĩ/, /u/, /e/, /ə/, /o/, /ɛ/, /a/, /ɔ/

声調素: /à/ (低平調), /ā/ (中平調), /á/ (高平調), /â/ (下降調)

ポー・カレン語の音節構造は C1(C2)V1(V2)(C3)/T と表すことができる。C1 と C2 と C3 は子音音素であり、V1 と V2 は母音音素であり、T は音節全体にかぶさる声調素である。

C1 位置に現れた子音を頭子音と呼び、/C-/ のようにハイフンを後置して表す。ここには /N/ を除くすべての子音音素が現れることができ、その音価は次のようになる。

/p-/ [p], /θ-/ [t̚~t̚θ~θ], /t-/ [t], /c-/ [tɕ~s], /k-/ [k], /ʔ-/ [ʔ], /ph-/ [pʰ], /th-/ [tʰ], /ch-/ [tɕʰ~sʰ], /kh-/ [kʰ], /b-/ [b~ʔb], /d-/ [d~ʔd~d], /ɕ-/ [ɕ~sʰ], /x-/ [x], /h-/ [h], /ɣ-/ [ɣ], /ɣ-/ [ɣ~ɦ], /m-/ [m], /n-/ [n], /ɲ-/ [ɲ], /ŋ-/ [ŋ], /w-/ [w], /j-/ [j~j], /l-/ [l], and /r-/ [r~ɹ]

注意すべきは、/b-/ と /d-/ が入破音 [b] と [d] だということである。ただし、速い発話ではどちらも入破音が弱くなって [ʔb] や [ʔd] のように発音されることがあり、さらに /d-/ は [d] になることがある。また、/c-/ [tɕ~s] と /ch-/ [tɕʰ~sʰ] は、通常の会話ではそれぞれ [tɕ] と [tɕʰ] で発音されるが、読み上げ音あるいは格式張った場面での発話においては、それぞれ変異音 [s] と [sʰ] で発音されることが多くなる。これは、おそらく、/c-/ と /ch-/ を表す正書法(仏教ポー・カレン文字; Kato [2021b] 参照)における綴り字が、ビルマ語の /s-/ と /sh-/ を表す文字と同じであることに由来する。ビルマ語は国家の公用語であり、学校教育でも教えられる権威のある言語であるから、当該文字のビルマ語音である [s] と [sʰ] が正式な発音であるとの意識が芽生えたのだと思われる。その他、/θ-/ [t̚~t̚θ~θ], /ɕ-/ [ɕ~sʰ], /ɣ-/ [ɣ~ɦ], /r-/ [r~ɹ] の各々に複数の発音があるのは、自由変異である。/ɕ-/ を [sʰ] と発音する話者の場合、/ch-/ を [sʰ] とする場合においては、/ɕ-/ と /ch-/ の発音の区別がなくなることがある。

これら頭子音のうち、/ŋ-/、/h-/、/r-/ は出現率の低い音素である。/ŋ-/ は /ŋɛ̃ŋə/ 「いがみ合う」(< モン語 ṇòŋ ṇə̀əŋ 「大声で口論する」 [坂本 1994: 117]¹)や /khəŋāin/ 「渡り歩く」(< モン語 kə̀əʔhə̀ŋ 「さすらう」 [2 音節目に古くは ŋ が存在した] [坂本 1994: 134])といったモン語からの借用語、あるいはビルマ語からの借用語にしか見られない。また、/h-/ は、/pa/ から変化した一人称複数代名詞 /hə/ 以外では、やはり /hàidài/ 「便所」(< モン語 hoi? dac 「便所」 [坂本 1994: 126])などのモン語からの借用語、あるいはビルマ語からの借用語にしか現れない。/r-/ についても、/cìrân/ 「計画する」(< モン語 ci riàŋ 「準備する」 [坂本 1994: 164])、/pə̀rə̀n/ 「ニュース」(< モン語 paʔraəŋ 「ニュース」 [坂本 1994: 887])といったモン語からの借用語、あるいはビルマ語からの借用語にしか見られない。

次に、C2 位置に現れた子音を介子音と呼び、/-C-/ のようにハイフンを前後に付して表す。この位置に現れることができるのは、/-w-/、/-l-/、/-r-/、/-j-/ の四つであり、音価は次のとおりである。

/-w-/ [w~ũ~ö], /-l-/ [l], /-r-/ [r~ɹ], and /-j-/ [j~j]

次に、「V1(V2)(C3)」の部分を韻母と呼び、/-VVC/ のようにハイフンを前置して表す。ここには、音節末子音 C3 の現れない開音節韻母、C3 として鼻音音素 /N/ の現れた鼻音化韻母、の 2 種類がある。

¹ 本稿においてモン語形式の表記は坂本(1994)に従う。坂本(1994)が記述対象としたモン語はタイ側のモン語方言の一つである。ポー・カレン語の語彙がモン語形式に由来する場合、本来はビルマ側の方言形を見なければならないが、それは困難なので、坂本(1994)に掲載されている形を一種の代表形として用いる。

まず、開音節韻母の種類と各韻母の音価は次のとおりである。/i/[ǝi(°)] は [i] の部分に咽頭化が見られることがある。/i/ は [i] であるが、音声記号 ɪ に声調を表す補助記号を付けると /i/ との区別が困難になってしまうため、下線を用いて /i/ と表記する。

/i/[ǝi(°)], /i/[i], /u/[u~ǝu], /i/[ɪ], /u/[ʊ], /e/[e], /ə/[ə], /o/[o], /ɛ/[ɛ], /a/[a], /ɔ/[ɔ], /ai/[ai], /au/[au]

次に、鼻音化韻母の種類と各韻母の音価は下掲のとおりである。音節末の C3 として現れる /N/ は口蓋垂鼻音として実現される場合と、前の母音を鼻母音化する要素として働く場合とがある。ビルマ語の鼻音化韻母と異なり、音節末の /N/ は後続する子音に同化することはない。

/iN/[iN~ĩ], /əN/[əN~ǝ̃], /aN/[ǎN~ǝ̃], /oN/[oN~õ], /eiN/[ei(N)], /əuN/[əu(N)], /ouN/[ou(N)], /aiN/[aiN~aĩ]

このうち /eiN/, /əuN/, /ouN/ の三つは、末尾の /N/ が極めて頻繁に脱落する。この傾向は若い世代でより強く、若い世代の通常の会話では /N/ が脱落することのほうが普通である。括弧でくくった N はそのことを表している。また、/iN/ は主にビルマ語からの借用語にのみ見られ、固有の語彙でこの韻母を有する単語は、これまでに /jainjɪN/ 「セミの一種」 しか見つかっていない。

なお、かつては、/iʔ/, /eʔ/, /oʔ/, /aʔ/, /ɔʔ/, /aiʔ/, /auʔ/, /auʔ/ といった促音化韻母があったと考えられるが(Kato 2021b)、パアン方言においてこれらの韻母の声門閉鎖音は、おそらく 20 世紀中頃までには消滅してしまった。ほぼ同じ頃に /auʔ/ と /auʔ/ が /au/ として合流した。開音節韻母のうち、/e/, /o/, /ai/, /au/ の四つは、借用語を除けば、促音化韻母のみに由来する。

次に、声調素の調値は下掲のとおりである。

/à/ (低平調)[11], /ā/ (中平調)[33~334], /á/ (高平調)[55], /ǎ/ (下降調)[51]

このうち中平調(/ā/)は、後続する音節がない場合には上昇する [334] で発音される傾向があり、後続する音節がある場合には平らな [33] で発音される傾向がある。さらに、この中平調は、しばしば息漏れ音(breathy voice)で発音される。

ポー・カレン語にも声調素が現れず弱く発音される軽声音節がある。軽声音節には /ə/ しかなれない。軽声音節は、声調を表す記号を付さないことで表す。例えば、/kəchân/ 「象」の第 1 音節が軽声音節である。ビルマ語と同様、軽声音節は絶対語末には現れない。/mə ʔán/ (非現実法/食べる) 「食べるだろう」における非現実法を表す助詞 /mə/ はこれ自体が語末であるが、実際の発話では必ず後に動詞を伴わなければならない。

3 音韻対応

本節では、ビルマ語の語彙がポー・カレン語に借用されたとき、どのように受容されるかを観察する。3.1 では頭子音、3.2 では介子音、3.3 では韻母、3.4 では声調を扱う。一貫して、ビルマ語の側から見たとき、ビルマ語の特定の音韻的要素がポー・カレン語のいかなる音韻的要素に対応するかという観点で論じる。したがって、ここでの「頭子音」「介子音」「韻母」「声調」という分類は、あくまでビルマ語側の音韻的要素の分類である。

以下では、二言語の形式間の対応を、次のように表現する。

B /ビルマ語形式/「意味」 > PK /ポー・カレン語形式/ (*/#/-)「意味」

左辺が供給する側であるビルマ語の形式とその意味で、右辺が受容する側であるポー・カレン語の形式とその意味である。ビルマ語形式とポー・カレン語形式の意味は異なることがあるので、別個に示している。むしろ、それぞれの言語の語彙体系における正確な意味を考慮に入れるなら、ビルマ語形式とポー・カレン語形式の意味が同一になることは皆無であると考えられる。ポー・カレン語形式の直後に置いた「()」には、ポー・カレン語固有の語彙からの音韻論的逸脱に関する情報を「*」「#」「-」といった記号で記している。これについては4.2で論じるので、まずは無視していただいて構わない。

頭子音、介子音、韻母、声調を、それぞれ、第 3.1.1 節～第 3.1.34 節、第 3.2.1 節～第 3.2.2 節、第 3.3.1 節～第 3.3.22 節、第 3.4.1 節～第 3.4.5 節において扱う。各節の例数は最少でも 3 個を示すことに努めた。1 個あるいは 2 個しか示していない場合は、例がそれしか見つからなかったことを意味する。

3.1 頭子音

以下、第 3.1.1 節から第 3.1.34 節において、ビルマ語の頭子音がポー・カレン語の音にどのように対応するかを論じる。

3.1.1 /p-/

ビルマ語の頭子音 /p-/ は、ポー・カレン語において頭子音 /p-/ で受容される。(1)から(5)に例を示すとおりである。(5)のポー・カレン語形式は、/pâ/ (下降調)で発音される場合と /pà/ (低平調)で発音される場合とがある。

- (1) B /peiʔ-/「閉まる、閉める」 > PK /pái/ (*)「閉まる、閉める」
- (2) B /pò-/「現れる」 > PK /pô/ (*)「ばれる」
- (3) B /ʔăpāin/「部分」 > PK /ʔəpāin/ (-.*)「部分」
- (4) B /pāin-/「所有する」 > PK /pāin/ (*)「所有する」
- (5) B /pà-/「含まれる」 > PK /pâ/ (*) または /pà/ (-)「含まれる」

3.1.2 /t̥-/

ビルマ語の頭子音 /t̥-/ は、ポー・カレン語において頭子音 /θ-/ で受容される。(6)から(8)に例を示すとおりである。

- (6) B /t̥ɛʔt̥à-/ 「楽な; 治る」 > PK /θɛθà/ (-.-) 「治る」
- (7) B /t̥à-/ 「優っている」 > PK /θà/ (-) 「優っている」
- (8) B /t̥éin/ 「十万」 > PK /θéin/ (*) 「十万」

3.1.3 /t-/

ビルマ語の頭子音 /t-/ は、ポー・カレン語において頭子音 /t-/ で受容される。(9)と(10)に例を示すとおりである。

- (9) B /t̪in-/ 「載せる」 > PK /t̪in/ (*#) 「(インターネットに)アップロードする」
- (10) B /t̪édê/ 「まっすぐに」 > PK /t̪été/ (-.-) 「まっすぐに」

3.1.4 /c-/

ビルマ語の頭子音 /c-/ は、ポー・カレン語において頭子音 /c-/ で受容される。(11)から(13)に例を示すとおりである。

- (11) B /cáun/ 「学校」 > PK /cōn/ (*) 「学校」
- (12) B /câjânânâ/ 「きちんと」 > PK /câcânánâ/ (-.-.-) 「きちんと」
- (13) B /cán-/ 「粗い; 乱暴な」 > PK /cān/ (*) 「乱暴な」

3.1.5 /k-/

ビルマ語の頭子音 /k-/ は、ポー・カレン語において頭子音 /k-/ で受容される。(14)と(15)に例を示すとおりである。(14)のビルマ語形式は英語 car の借用語である。これを「(英語 car)」という書き方で示している(以下同様)。また、(15)のビルマ語形式の第1音節はパーリ語 kamma の借用語である。これを「(1 パーリ語 kamma)」という書き方で示している。「1」は第1音節という意味である(以下同様)。なお、本稿では、パーリ語形は水野(1991)、サンسكريット語形は Monier-Williams (1899)に従う。

- (14) B /ká/ 「自動車」(英語 car) > PK /kā/ (*) 「自動車」
- (15) B /kân káun-/ 「運が良い」(1 パーリ語 kamma) > PK /kânkōn/ (*.*) 「運良く」

3.1.6 /ʔ-/

ビルマ語の頭子音 /ʔ-/ は、ポー・カレン語において頭子音 /ʔ-/ で受容される。(16)と(17)に例を示すとおりである。

(16) B /ʔàun-/ 「合格する」 > PK /ʔòn/ (-) 「合格する」

(17) B /ʔá pé-/ 「応援する」 > PK /ʔāpē/ (*.*) 「応援する」

3.1.7 /ph-/

ビルマ語の頭子音 /ph-/ は、ポー・カレン語において頭子音 /ph-/ で受容される。(18)から(20)に例を示すとおりである。

(18) B /phé/ 「花札、トランプ」 > PK /phē/ (-) 「花札、トランプ」

(19) B /phàun/ 「いかだ」 > PK /phôn/ (-) 「いかだ」

(20) B /phóun/ 「電話」(英語 phone) > PK /phōun/ (-) 「電話」

3.1.8 /th-/

ビルマ語の頭子音 /th-/ は、ポー・カレン語において頭子音 /th-/ で受容される。(21)から(23)に例を示すとおりである。(23)のビルマ語 /thì thó-/ は、/thì/ が「くじ」、/thó-/ が「刺す」という意味で、全体として「くじを買う」という意味のイディオムをなす。ポー・カレン語では、基本語順に合わせて、逆の語順で受容されている。

(21) B /thàun/ 「刑務所」 > PK /thôn/ (-) 「刑務所」

(22) B /thìn-/ 「思う」 > PK /thîN/ (#) 「思い込む」

(23) B /thì thó-/ 「くじを買う」 > PK /thō thî/ (*.-) 「くじを買う」

3.1.9 /ch-/

ビルマ語の頭子音 /ch-/ は、ポー・カレン語において頭子音 /ch-/ で受容される。(24)に例を示すとおりである。この例のビルマ語 /phóun/ は(20)に示したように英語 phone の借用語、/châ-/ は「落とす」という意味の動詞であり、全体として「電話を切る」という意味のイディオムをなす。ポー・カレン語では、基本語順に合わせて、逆の語順で受容されている。

(24) B /phóun châ-/ 「電話を切る」(1 英語 phone) > PK /chá phōun/ (-.-) 「電話を切る」

3.1.10 /kh-/

ビルマ語の頭子音 /kh-/ は、ポー・カレン語において頭子音 /kh-/ で受容される。(25)と(26)に例を示すとおりである。

(25) B /khòuN/ 「腰掛け」 > PK /khôuN/ (-) 「卓袱台」

(26) B /khédàN/ 「鉛筆」 > PK /khētân/ (-.*) 「鉛筆」

3.1.11 /b-/

ビルマ語の頭子音 /b-/ は、ポー・カレン語において頭子音 /p-/ で受容される。(27)から(30)に例を示すとおりである。

(27) B /béiN/ 「車輪」 > PK /pēiN/ (*) 「車輪」

(28) B /bú/ 「容器」 > PK /pū/ (*) 「容器」

(29) B /nànbəʔ/ 「番号」(英語 number) > PK /nânpá/ (-.) 「番号」

(30) B /bóuN/ 「爆弾」(英語 bomb) > PK /pōuN/ (*) 「爆弾」

次の(31)は、ビルマ語の発音が(27)と同じだが、頭子音 /b-/ がポー・カレン語の頭子音 /ph-/ に対応している。この対応の理由としては、①ポー・カレン語形がビルマ語由来ではなくモン語 *phin* 「アヘン」(坂本 1994: 649)の借用である可能性、および、②ビルマ語の借用語ではあるもののモン語の影響を受けた可能性、の二つが考えられる。いずれにしても、例外的な対応である。

(31) B /béiN/ 「アヘン」 > PK /phēiN/ (-) 「アヘン」

次の(32)の /b-/ が /ph-/ に対応しているのは、ビルマ語形が複合語であり、2音節目の /bó/ の原形が /phó/ であることに由来する。これについては、4.1で議論する。

(32) B /tàn**bó**/ 「値段、価値」 > PK /tân**phō**/ (*.*) 「値段、価値」

ビルマ語の /b-/ をポー・カレン語が /b-/ で受容せずに /p-/ で受容するのは、ポー・カレン語の /b-/ が入破音 [b] であるためだと考えられる。おそらく、ポー・カレン語話者は、ビルマ語の /b-/ [b] が、ポー・カレン語の /b-/ [b] よりも /p-/ [p] に近い音だと認識しているのではないか。

3.1.12 /ɖ-/

ビルマ語の頭子音 /ɖ-/ は、ポー・カレン語において頭子音 /θ-/ で受容される。(33)から(35)に例を示すとおりである。

(33) B /ʔäyâ**ɖ**à/ 「味」(パーリ語 *rasa*) > PK /ʔajá**θ**â/ (-.-) 「味」

(34) B /ʔèiN**ɖ**à/ 「便所」 > PK /ʔèiN**θ**â/ (-.) 「便所」

(35) B /cáun**ɖ**á/ 「学生」 > PK /cōN**θ**ā/ (*.*) 「学生」

3.1.13 /d-/

ビルマ語の頭子音 /d-/ は、ポー・カレン語において頭子音 /t-/ で受容される。(36)から(38)に例を示すとおりである。なお、(38)のポー・カレン語形 /tū/ は、多く、/khán/ 「脚、足」と複合した /khántū/ という形で使われる。

(36) B /daʔpòuN/ 「写真」 (1 パーリ語 dhātu) > PK /tápôuN/ (-.*) 「写真」

(37) B /dàin/ 「(宝くじなどの)胴元」 > PK /tâin/ (*) 「(宝くじなどの)胴元」

(38) B /dú/ 「膝」 > PK /tū/ (*) 「膝」

下記の 2 例は上記の一般化に沿っているように見えるが、実は、この 2 例のポー・カレン語の /t-/ ((39)においては 2 音節目の /t-/)は、ビルマ語の 2 音節目の原形が持つ /t-/ に対応していると考えられる。3.1.11 の(32)で見た原理と同じである。詳しくは 4.1 で議論する。

(39) B /têdê/ 「まっすぐに」 > PK /tété/ (-.-) 「まっすぐに」 [= (10)]

(40) B /khédàn/ 「鉛筆」 > PK /khētân/ (-.*) 「鉛筆」 [= (26)]

ビルマ語の /d-/ をポー・カレン語が /d-/ で受容せずに /t-/ で受容するのは、ポー・カレン語の /d-/ が入破音 [d] であるためだと考えられる。これは、3.1.11 で述べた、ビルマ語の /b-/ がポー・カレン語 /p-/ で受容される理由と共通している。ポー・カレン語話者において、ビルマ語の /d-/ [d] は、ポー・カレン語の /d-/ [d] よりも /t-/ [t] に近い音だと認識されているのではないか。

3.1.14 /j-/

ビルマ語の頭子音 /j-/ は、ポー・カレン語において頭子音 /c-/ で受容される。(41)と(42)に例を示すとおりである。

(41) B /jāpàn/ 「日本」 (英語 Japan) > PK /cəpân/ (-.*) 「日本」

(42) B /jauʔ/ 「峡谷、溪谷」 > PK /cáu/ (*) 「ジャングル、深山」

下の(43)と(44)では、ビルマ語 /j-/ がポー・カレン語 /ch-/ に対応しているが、これは 3.1.11 で述べたのと同じように、ビルマ語形が複合語であり、2 音節目の /jiʔ/ および /jò/ の原形がそれぞれ /chiʔ/ と /chò/ であることに由来する。これについては、4.1 で議論する。

(43) B /míjiʔ/ 「マッチ」 > PK /mīchí/ (-.-) 「マッチ」

(44) B /hínjò/ 「スープ」 > PK /hīnchô/ (##.-) 「スープ」

3.1.15 /g-/

ビルマ語の頭子音 /g-/ は、ポー・カレン語において頭子音 /k-/ で受容される。(45)と(46)に例を示すとおりである。

(45) B /géin/ 「ゲーム」 (英語 game) > PK /kēin/ (*) 「ゲーム」

(46) B /tógai?/ 「ツアーガイド」 (英語 tour guide) > PK /tōkái/ (*.*) 「ツアーガイド」

下の(47)では、ビルマ語 /g-/ がポー・カレン語 /kh-/ に対応しているが、これは 3.1.11 で述べたのと同じように、ビルマ語形が複合語であり、2 音節目の /gâ/ の原形が /khâ/ であることに由来する。これについては、4.1 で議論する。

(47) B /lâgâ/ 「月給」 > PK /lâkhâ/ (-.) 「月給」

3.1.16 /s-/

ビルマ語の頭子音 /s-/ は、ポー・カレン語において頭子音 /c-/ で受容される。(48)から(51)に例を示すとおりである。

(48) B /sá/ 「種類」 > PK /cā/ (*) 「種類」

(49) B /lei?sà/ 「住所」 > PK /láicâ/ (-.*) 「住所」

(50) B /sɛ?/ 「機械」 (パーリ語 cakka) > PK /cé/ (-) 「機械」

(51) B /sòun-/ 「揃っている」 > PK /côun/ (*) 「揃っている」

3.1.17 /ɛ-/

ビルマ語の頭子音 /ɛ-/ は、ポー・カレン語において頭子音 /e-/ で受容される。(52)から(55)に例を示すとおりである。

(52) B /ɛín-/ 「片付いている、すっきりしている」 > PK /ɛīn/ (#) 「すばらしい; 美味しい」

(53) B /ɛou?-/ 「複雑な、面倒な」 > PK /ɛáú/ (-) 「複雑な、面倒な」

(54) B /?ăɛai?/ 「急所、弱点」 > PK /?əɛái/ (-.) 「急所、弱点」

(55) B /ɛô-/ 「減らす、値下げする」 > PK /ɛó/ (-) 「値下げする」

3.1.18 /h-/

ビルマ語の頭子音 /h-/ は、ポー・カレン語において頭子音 /h-/ で受容される。(56)から(58)に例を示すとおりである。

(56) B /hó-/ 「(仏法を)説く」 > PK /hō/ (#) 「(仏法を)説く」

(57) B /hínjò/ 「スープ」 > PK /hīnchô/ (##.-) 「スープ」 [= (44)]

(58) B /hàṭà/ 「お笑い」 (パーリ語 hāsa) > PK /hàṭá/ (#.-) 「お笑い」

3.1.19 /sh-/

ビルマ語の頭子音 /sh-/ は、ポー・カレン語において頭子音 /ch-/ で受容される。(59)から(61)に例を示すとおりである。

(59) B /shaʔpyà/ 「石鹼」 > PK /chápjà/ (-.*) 「石鹼」

(60) B /shàin/ 「店」 > PK /châin/ (-) 「店」

(61) B /shû/ 「賞」 > PK /chú/ (-) 「賞」

3.1.20 /z-/

ビルマ語の頭子音 /z-/ は、ポー・カレン語において頭子音 /c-/ で受容される。(62)と(63)に例を示すとおりである。ただし、この2例における /c-/ は [tɕ] ではなく変異音 [s] で発音されることが多い。

(62) B /zaʔlaiʔ/ 「主演」 > PK /cálái/ (-.-) 「主演」

(63) B /zíyò/ 「ナツメのジャム」 > PK /cījô/ (*.-) 「ナツメのジャム」

下の(64)では、ビルマ語 /z-/ がポー・カレン語 /ch-/ に対応しているが、これは3.1.11で述べたのと同じように、ビルマ語形が複合語であり、2音節目の /zán/ の原形が /shán/ であることに由来する。これについては、4.1で議論する。

(64) B /thúzán-/ 「奇妙な」 > PK /thūchān/ (-.-) 「奇妙な」

3.1.21 /m-/

ビルマ語の頭子音 /m-/ は、ポー・カレン語において頭子音 /m-/ で受容される。(65)から(68)に例を示すとおりである。

(65) B /màin/ 「マイル」 (英語 mile) > PK /mâin/ (-) 「マイル」

(66) B /mándǎlé/ 「マンダレー」 > PK /māntǎlē/ (-.-.*) 「マンダレー」

(67) B /míngǎ/ 「男優」 > PK /mīnṭā/ (#.*) 「男優」

(68) B /mīḡázû/ 「家族」 > PK /míṭācú/ (-.*.-) 「家族」

3.1.22 /n-/

ビルマ語の頭子音 /n-/ は、ポー・カレン語において頭子音 /n-/ で受容される。(69)から(71)に例を示すとおりである。なお、(70)のポー・カレン語形 /nàji/ 「時計」と同じ意味の単

語に /nàdi/ があるが、この形式はサンスクリット語 *nāḍī* に由来するモン語 *nèədi* (坂本 1994: 289)の借用語である。

(69) B /nau?câ-/ 「遅い」 > PK /náucá/ (-.) 「遅刻する、間に合わない」

(70) B /nàyi/ 「時計」 (サンスクリット語 *nālī*) > PK /nàji/ (-.) 「時計」

(71) B /nè/ 「地域; 田舎」 > PK /nê/ (-) 「田舎」

3.1.23 /ɲ-/

ビルマ語の頭子音 /ɲ-/ は、ポー・カレン語において頭子音 /ɲ-/ で受容される。(72)から(74)に例を示すとおりである。

(72) B /ɲò-/ 「茶色の」 > PK /ɲô/ (#) 「茶色の」

(73) B /ɲàn/ 「智慧」 (パーリ語 *ñāṇa*) > PK /ɲân/ (-) 「智慧」

(74) B /ʔəɲà/ 「上ビルマ」 > PK /ʔəɲâ/ (-) 「上ビルマ」

3.1.24 /ŋ-/

ビルマ語の頭子音 /ŋ-/ は、ポー・カレン語において頭子音 /ŋ-/ で受容される。(75)に例を示すとおりである。

(75) B /ŋáN/ 「ひきつけ」 > PK /ŋāN/ (#) 「ひきつけ」

3.1.25 /hm-/

ビルマ語の頭子音 /hm-/ は、ポー・カレン語において頭子音 /m-/ で受容される。(76)と(77)に例を示すとおりである。

(76) B /hmàn-/ 「正しい」 > PK /mân/ (-) 「定刻通りの; 規則正しい」

(77) B /lɛʔhmaʔ/ 「切符」 > PK /léamá/ (-.) 「切符」

3.1.26 /hn-/

ビルマ語の頭子音 /hn-/ は、ポー・カレン語において頭子音 /n-/ で受容される。(78)に例を示すとおりである。

(78) B /hnó-/ 「目覚めさせる; (エンジンを)掛ける」 > PK /nō/ (*) 「(エンジンを)掛ける」

3.1.27 /hɲ-/

頭子音 /hɲ-/ を持つビルマ語形式に由来するポー・カレン語の借用語は、私の収集したデータには見当たらなかった。3.1.25、3.1.26、3.1.28、3.1.34 に示した対応を見ると、ビルマ

語の無声共鳴音はポー・カレン語では同じ調音点の有声共鳴音で受容されているので、もしビルマ語の /hɲ-/ を持つ形式がポー・カレン語に借用されるとしたら、それは /ɲ-/ で受容されることが予測される。

3.1.28 /hɲ-/

ビルマ語の頭子音 /hɲ-/ は、ポー・カレン語において頭子音 /ɲ-/ で受容される。(79)に例を示すとおりである。

(79) B /hɲá-/ 「借りる; 貸す」 > PK /ɲā/ (#) 「借りる; 貸す」

3.1.29 /w-/

ビルマ語の頭子音 /w-/ は、ポー・カレン語において頭子音 /w-/ で受容される。(80)に例を示すとおりである。

(80) B /wàḍṇà/ 「興味」 (パーリ語 *vāsanā*) > PK /wàṭṇā/ (-.-) 「興味」

3.1.30 /y-/

ビルマ語の頭子音 /y-/ は、ポー・カレン語において基本的には頭子音 /j-/ で受容される。(81)から(86)に例を示すとおりである。ただし、(85)と(86)のポー・カレン語形式は、/j-/ではなく /r-/ で発音されることもある。これは、ビルマ語の /ʔàndǎyè/ と /yóun/ の /y-/ が <r> で書かれるからではないかと思われる。ビルマ語の /y-/ には */y-/ に由来するものと */r-/ に由来するものとがあり、それぞれ <y> と <r> で書かれる。(81)のビルマ語形式 /yò/ の /y-/ は <y> で書かれ、(82)から(86)のビルマ語形式の /y-/ は <r> で書かれる。<r> はビルマ語で例えば /rèdiyò/ 「ラジオ」のように /r-/ で発音されることがあるから、(85)と(86)のポー・カレン語形式で /r-/ が使われることがあるのは、このような形式からの類推が働いたのではないかと思われる。ただし、(82)から(84)のポー・カレン語形式の /j-/ が /r-/ で発音されることはない。これがなぜかは分からない。

(81) B /yò/ 「ジャム」 > PK /jô/ (*) 「ジャム」

(82) B /yàṇḍù/ 「敵」 > PK /jàṇṭhù/ (-) 「敵」

(83) B /ʔǎyàun/ 「色」 > PK /ʔəjôn/ (-) 「色」

(84) B /ʔǎyāḍà/ 「味」 (パーリ語 *rasa*) > PK /ʔəjāṭā/ 「味」 (-.-) [= (33)]

(85) B /ʔàndǎyè/ 「危険」 (パーリ語 *antarāya*) > PK /ʔàntəjê/ (-.-) または /ʔàntərê/ (-.-#) 「危険」

(86) B /yóun/ 「事務所」 > PK /jōun/ (-) または /rōun/ (#) 「事務所」

3.1.31 /l-/

ビルマ語の頭子音 /l-/ は、ポー・カレン語において頭子音 /l-/ で受容される。(87)から(89)に例を示すとおりである。

(87) B /lâgâ/ 「月給」 > PK /lâkhá/ (-.-) 「月給」 [= (47)]

(88) B /lùlèin/ 「詐欺師」 > PK /lùlèin/ (-.-) 「詐欺師」

(89) B /lɛʔhmaʔ/ 「切符」 > PK /lémá/ (-.-) 「切符」 [= (77)]

3.1.32 /r-/

ビルマ語の頭子音 /r-/ は、ポー・カレン語において頭子音 /r-/ で受容される。(90)に例を示すとおりである。

(90) B /tăreiʔshàn/ 「動物」 (パーリ語 *tiracchāna*) > PK /təráichân/ (-.#.-) 「動物」

3.1.33 /hw-/

頭子音 /hw-/ を持つビルマ語形式に由来するポー・カレン語の借用語は、私の収集したデータには見当たらなかった。3.1.25、3.1.26、3.1.28、3.1.34 に示した対応を見ると、ビルマ語の無声共鳴音はポー・カレン語では同じ調音点の有声共鳴音で受容されているので、もしビルマ語の /hw-/ を持つ形式がポー・カレン語に借用されるとしたら、それは /w-/ で受容されることが予測される。

3.1.34 /hl-/

ビルマ語の頭子音 /hl-/ は、ポー・カレン語において頭子音 /l-/ で受容される。(91)に例を示すとおりである。

(91) B /ʔāhlùgàn/ 「寄付の集金人」 > PK /ʔəlùkhân/ (-.-.-) 「寄付の集金人」

3.2 介子音

次に介子音を見る。2.1 で見たとおり、ビルマ語の介子音には /-w-/ と /-y-/ の二つがある。

3.2.1 /-w-/

ビルマ語の介子音 /-w-/ は、ポー・カレン語において介子音 /-w-/ で受容される。(92)から(94)に例を示すとおりである。

(92) B /kwà-/ 「異なる」 > PK /kwâ/ (*) 「異なる」

(93) B /pwé/ 「祭」 > PK /pwē/ (*) 「祭」

(94) B /khweʔ/ 「コップ」 > PK /khwé/ (-.-) 「コップ」

3.2.2 /-y-/

ビルマ語の介子音 /y-/ は、ポー・カレン語において介子音 /j-/ で受容される。(95)から(97)に例を示すとおりである。

(95) B /byáunbyàn/ 「逆に、反対に」 > PK /pjōnpjân/ (*.*) 「逆に、反対に」

(96) B /pyìn-/ 「直す」 > PK /pjîN/ (*#) 「直す」

(97) B /phyè-/ 「答える」 > PK /phjê/ (*) 「(試験を)受ける」

3.3 韻母

以下、第 3.3.1 節から第 3.3.22 節において、ビルマ語の韻母がポー・カレン語の音にどのように対応するかを見る。3.3.1 から 3.3.7 までは開音節韻母、3.3.8 から 3.3.14 までは鼻音化韻母、3.3.15 から 3.3.22 までは促音化韻母である。

3.3.1 /-i/

ビルマ語の韻母 /-i/ は、ポー・カレン語において韻母 /-i/ で受容される。(98)から(100)に例を示すとおりである。

(98) B /kìlò/ 「キログラム」 (英語 kilo) > PK /kìlô/ (-.*) 「キログラム」

(99) B /zíyò/ 「ナツメのジャム」 > PK /cījô/ (*.*) 「ナツメのジャム」 [= (63)]

(100) B /tánsi-/ 「並ぶ」 > PK /tāncî/ (*.*) 「並ぶ」

3.3.2 /-e/

ビルマ語の韻母 /-e/ は、ポー・カレン語において韻母 /-e/ で受容される。(101)から(103)に例を示すとおりである。

(101) B /ʔăyé/ 「事柄、案件」 > PK /ʔəjē/ (-.*) 「事柄、案件」

(102) B /sèdānà/ 「誠意」 (パーリ語 cetanā) > PK /cètənâ/ (-.-.) 「誠意」

(103) B /shéyòun/ 「病院」 > PK /chējôun/ (*.-) 「病院」

3.3.3 /-ɛ/

ビルマ語の韻母 /-ɛ/ は、ポー・カレン語において韻母 /-ɛ/ で受容される。(104)から(106)に例を示すとおりである。

(104) B /nè/ 「地域; 田舎」 > PK /nê/ (-) 「田舎」 [= (71)]

(105) B /pwé/ 「祭」 > PK /pwē/ (*) 「祭」 [= (93)]

(106) B /mé/ 「投票用紙」 > PK /mē/ (-) 「投票用紙」

3.3.4 /-a/

ビルマ語の韻母 /-a/ は、ポー・カレン語において韻母 /-a/ で受容される。(107)から(109)に例を示すとおりである。

(107) B /ká/ 「自動車」(英語 car) > PK /kā/ 「自動車」(*) [= (14)]

(108) B /pà-/ 「含まれる」 > PK /pâ/ (*) または /pà/ (-) 「含まれる」 [= (5)]

(109) B /wàḍānā/ 「興味」(パーリ語 vāsanā) > PK /wàṭṭānā/ (-.-) 「興味」 [= (80)]

3.3.5 /-ɔ/

ビルマ語の韻母 /-ɔ/ は、ポー・カレン語において韻母 /-ɔ/ で受容される。(110)から(112)に例を示すとおりである。

(110) B /pḥ-/ 「現れる」 > PK /pḥ/ (*) 「ばれる」 [= (2)]

(111) B /hḥ-/ 「(仏法を)説く」 > PK /hḥ/ (#) 「(仏法を)説く」 [= (56)]

(112) B /yḥ-/ 「混ざる; 混ぜる」 > PK /jḥ/ (-) 「混ざる; 混ぜる」

3.3.6 /-o/

ビルマ語の韻母 /-o/ は、ポー・カレン語において韻母 /-o/ で受容される。(113)から(115)に例を示すとおりである。

(113) B /tānbó/ 「値段、価値」 > PK /tānpḥō/ (*.*) 「値段、価値」 [= (32)]

(114) B /thó-/ 「刺す; (時間に)なる」 > PK /thō/ (*) 「(時間に)なる」

(115) B /lò-/ 「必要な」 > PK /lō/ (*) 「必要な」

3.3.7 /-u/

ビルマ語の韻母 /-u/ は、ポー・カレン語において韻母 /-u/ で受容される。(116)から(118)に例を示すとおりである。

(116) B /lū-/ 「奪う」 > PK /lū/ (-) 「(何かを行う時間を)苦労して作る」

(117) B /thúzán-/ 「奇妙な」 > PK /thūchān/ (-.-) 「奇妙な」 [= (64)]

(118) B /eūqín/ 「景色」 > PK /eúkhīn/ (-.#) 「景色」

3.3.8 /-iN/

ビルマ語の韻母 /-iN/ は、ポー・カレン語において韻母 /-iN/ で受容される。(119)から(121)に例を示すとおりである。2.2 で述べたように、ポー・カレン語の韻母 /-iN/ は、主にビルマ語からの借用語にのみ見られる。

- (119) B /thìN-/ 「思う」 > PK /thîN/ (#) 「思い込む」 [= (22)]
 (120) B /t̥wín-/ 「入れる」 > PK /θwîN/ (*#) 「輸入する; 録音する」
 (121) B /lèyìnbyàn/ 「飛行機」 > PK /lèjìnpjân/ (-.#.*) 「飛行機」

3.3.9 /-eĩN/

ビルマ語の韻母 /-eĩN/ は、ポー・カレン語において韻母 /-eĩN/ で受容される。(122)から(124)に例を示すとおりである。

- (122) B /géĩN/ 「ゲーム」 (英語 game) > PK /kēĩN/ (*) 「ゲーム」 [= (45)]
 (123) B /lèĩN/ 「騙す」 > PK /lēĩN/ (-.-) 「詐欺を行う」
 (124) B /béĩN/ 「車輪」 > PK /pēĩN/ (*) 「車輪」 [= (27)]

3.3.10 /-aĩN/

ビルマ語の韻母 /-aĩN/ は、ポー・カレン語において韻母 /-aĩN/ で受容される²。(125)から(127)に例を示すとおりである。

- (125) B /tàĩN/ 「通報する」 > PK /tāĩN/ (*) 「通報する」
 (126) B /láĩN/ 「(無線通信の)電波」 (英語 line) > PK /lāĩN/ (-) 「(無線通信の)電波」
 (127) B /pāĩN/ 「所有する」 > PK /pāĩN/ (*) 「所有する」 [= (4)]

3.3.11 /-aŋ/

ビルマ語の韻母 /-aŋ/ は、ポー・カレン語において韻母 /-aŋ/ で受容される。(128)から(130)に例を示すとおりである。

- (128) B /hmàn-/ 「正しい」 > PK /māŋ/ (*) 「定刻通りの; 規則正しい」 [= (76)]
 (129) B /lìnbán/ 「盆、トレイ」 > PK /lìnpāŋ/ (#.*) 「盆、トレイ」
 (130) B /dàn/ 「罰」 (パーリ語 daṇḍa) > PK /tāŋ/ (*) 「罰」

3.3.12 /-aũN/

ビルマ語の韻母 /-aũN/ は、ポー・カレン語において韻母 /-oŋ/ で受容される。(131)から(133)に例を示すとおりである。

- (131) B /cáũN/ 「学校」 > PK /cōŋ/ (*) 「学校」 [= (11)]

² ビルマ語の /-aĩN/ の発音は [aĩN~aĩ] であるが、ポー・カレン語の /-aĩN/ は [aĩN~aĩ] であり、/i/ の部分の発音が異なる(2.1 と 2.2 の音声記述を参照)。ポー・カレン語の話者にはビルマ語との二言語話者が多いが、その中にはこの違いを明確に意識している者も少なくない。

(132) B /thàun/ 「刑務所」 > PK /thôn/ (-) 「刑務所」 [= (21)]

(133) B /shù táun-/ 「祈る」 > PK /chútôn/ (-.*) 「願掛けする」

3.3.13 /-oun/

ビルマ語の韻母 /-oun/ は、ポー・カレン語において韻母 /-oun/ で受容される。(134)から(136)に例を示すとおりである。

(134) B /sòun-/ 「揃っている」 > PK /côôn/ (*) 「揃っている」 [= (51)]

(135) B /yóun/ 「事務所」 > PK /jōun/ (-) または /rōun/ (-) 「事務所」 [= (86)]

(136) B /tōun-/ 「使う」 > PK /θōun/ (*) 「使う」

3.3.14 /-un/

ビルマ語の韻母 /-un/ は、ポー・カレン語において韻母 /-on/ で受容される。(137)に例を示すとおりである。

(137) B /shún/ 「斉飯」 > PK /chôn/ (-) 「斉飯」

3.3.15 /-i?/

ビルマ語の韻母 /-i?/ は、ポー・カレン語において、韻母 /-i/ に高平調がかぶさった /-i/ で受容される。(138)に例を示すとおりである。一般に、ビルマ語の促音化韻母は、ポー・カレン語では高平調を伴って受容される。3.3.16 以降も同様である。

(138) B /míjǐ?/ 「マッチ」 > PK /mīchí/ (-.-) 「マッチ」 [= (43)]

3.3.16 /-ei?/

ビルマ語の韻母 /-ei?/ は、ポー・カレン語において、韻母 /-ai/ に高平調がかぶさった /-ái/、あるいは、韻母 /-ein/ に高平調がかぶさった /-éin/ で受容される。/-ai/ で受容された例を(139)から(141)に、/-ein/ で受容された例を(142)に示す。

(139) B /pei?-/ 「閉まる; 閉める」 > PK /pái/ (*) 「閉まる; 閉める」 [= (1)]

(140) B /tǎrei?shàn/ 「動物」(パーリ語 *tiracchāna*) > PK /təráichân/ (-.#.-) 「動物」 [= (90)]

(141) B /θǎyè?ei?/ 「筆入れ(「革製の袋」の意)」 > PK /θəjê?ái/ (-.*.*) 「筆入れ」

(142) B /kei?/ 「ケーキ」 > PK /kéin/ (-) 「ケーキ」

私は、ビルマ語の /-ei?/ がポー・カレン語で /-ai/ で受容されるか /-ein/ で受容されるかの違いは、借用された時期の違いであり、/-ai/ は比較的古い時期の借用、/-ein/ は比較的新し

い時期の借用なのではないかと考えている。2.2 で述べたとおり、もともと /-ai/ は、声門閉鎖音を末尾に持つ /-aiʔ/ であった。このような声門閉鎖音終わりの音節が存在した時代の話者にとって、ビルマ語の /-eiʔ/ に最も近く感じられるポー・カレン語の韻は、/-aiʔ/ だったのではないか。その後、/-aiʔ/ は声門閉鎖音を失って /-ai/ になり、一方、2.2 で述べたとおり、鼻音化韻母の /-ein/ は若い世代で末尾の /N/ の脱落が普通になってきている。だとすれば、若い世代の発音である /-ai/ [ai] と /-ein/ [ei] を比べたとき、/-ein/ [ei] のほうがビルマ語の /-eiʔ/[eiʔ] に近く感じられ、/-ein/ で受容されるようになったのではないか。実際、若い世代では、稀ではあるが、(139)のポー・カレン語 /pái/ 「閉まる; 閉める」を /péin/ で発音する話者もあり、これは、上記のような発音の変化を反映していると思われる。

3.3.17 /-aiʔ/

ビルマ語の韻母 /-aiʔ/ は、ポー・カレン語において、韻母 /-ai/ に高平調がかぶさった /-ái/ で受容される。(143)から(145)に例を示すとおりである。

(143) B /caiʔ-/ 「好む」 > PK /cái/ (*) 「好む」

(144) B /taiʔ-/ 「ぶつかる」 > PK /tái/ (*) 「(自動車が)衝突する」

(145) B /ʔăcaiʔ/ 「急所、弱点」 > PK /ʔăcái/ (-) 「急所、弱点」 [= (54)]

3.3.18 /-ɛʔ/

ビルマ語の韻母 /-ɛʔ/ は、ポー・カレン語において、韻母 /-ɛ/ に高平調がかぶさった /-é/ で受容される。(146)から(148)に例を示すとおりである。なお、(147)のビルマ語 /lɛʔkòun/ は、モン州やカレン州の方言でよく使われる形式であり、「非常に」の意味を持つ。

(146) B /sɛʔ/ 「機械」(パーリ語 *cakka*) > PK /cé/ (-) 「機械」 [= (50)]

(147) B /lɛʔkòun/ 「非常に」 > PK /lékòun/ (-.*) 「非常に」

(148) B /thwɛʔ-/ 「出る」 > PK /thwé/ (-) 「(宝くじの番号などが)発表される」

3.3.19 /-aʔ/

ビルマ語の韻母 /-aʔ/ は、ポー・カレン語において、韻母 /-a/ に高平調がかぶさった /-á/ で受容される。(149)から(151)に例を示すとおりである。

(149) B /kaʔ/ 「(登録証などの)カード」(英語 *card*) > PK /ká/ (-) 「(登録証などの)カード」

(150) B /phyəʔ-/ 「切る; (酒などを)止める」 > PK /phjá/ (-) 「(酒などを)止める」

(151) B /shaʔpyà/ 「石鹼」 > PK /chápjà/ (-.*) 「石鹼」 [= (59)]

3.3.20 /-auʔ/

ビルマ語の韻母 /-auʔ/ は、ポー・カレン語において、韻母 /-au/ に高平調がかぶさった /-áu/ で受容される。(152)から(154)に例を示すとおりである。

(152) B /khauʔshwé/ 「小麦粉で作った麺」 > PK /kháuchwē/ (-.-) 「小麦粉で作った麺」

(153) B /nauʔcâ-/ 「遅い」 > PK /náucá/ (-.-) 「遅刻する、間に合わない」 [= (69)]

(154) B /pauʔ-/ 「穴があく; (くじが) 当たる」 > PK /páu/ (*) 「(くじが) 当たる」

3.3.21 /-ouʔ/

ビルマ語の韻母 /-ouʔ/ は、ポー・カレン語において、韻母 /-au/ に高平調がかぶさった /-áu/、あるいは、韻母 /-oun/ に高平調がかぶさった /-óun/ で受容される。/-au/ で受容された例を(155)と(156)に、/-oun/ で受容された例を(157)と(158)に示す。

(155) B /khouʔ-/ 「(木などを)切る」 > PK /kháu/ (-) 「(木などを)切る」

(156) B /əouʔ-/ 「複雑な、面倒な」 > PK /cáu/ (-) 「複雑な、面倒な」 [= (53)]

(157) B /khauʔshwétouʔ/ 「麺のサラダ」 > PK /kháuchwēθóun/ (-.-.-) 「麺のサラダ」

(158) B /mouʔwâ/ 「入口」 (1 パーリ語 mukha) > PK /móunwá/ (-.-) 「入口」

3.3.16 で述べたのと同じように、私は、ビルマ語の /-ouʔ/ がポー・カレン語で /-au/ で受容されるか /-oun/ で受容されるかの違いは、借用された時期の違いであり、/-au/ は比較的古い時期の借用、/-oun/ は比較的新しい時期の借用なのではないかと考えている。これも 2.2 で述べたとおり、もともと /-au/ は、声門閉鎖音を末尾に持つ /-auʔ/ あるいは /-auwʔ/ であった。このような声門閉鎖音終わりの音節が存在した時代の話者にとって、ビルマ語の /-ouʔ/ に最も近く感じられるポー・カレン語の韻は、/-auʔ/ だったと思われる。その後、/-auʔ/ は声門閉鎖音を失うと同時に /-auwʔ/ と合流して /-au/ になり、さらに、2.2 で述べたとおり、鼻音化韻母の /-oun/ は若い世代で末尾の /n/ の脱落が普通になってきている。だとすれば、若い世代の発音である /-au/ [au] と /-oun/ [ou] を比べたとき、/-oun/ [ou] のほうがビルマ語の /-ouʔ/[ouʔ] に近く感じられ、/-oun/ で受容されるようになったのではないか。すなわち、ビルマ語の /-eiʔ/ がポー・カレン語の /-ai/ と /-ein/ の 2 韻母で受容されることと、/-ouʔ/ がポー・カレン語の /-au/ と /-oun/ の 2 韻母で受容されることのいずれにも、音節末の /ʔ/ と /n/ の脱落の問題が関わっているのである。

3.3.22 /-uʔ/

ビルマ語の韻母 /-uʔ/ は、ポー・カレン語において、韻母 /-u/ に高平調がかぶさった /-ú/ で受容される。(159)に例を示すとおりである。

(159) B /lu?lu?la?lá/ 「自由に」 > PK /lólólá/ (-.-.-) 「自由に」

3.4 声調

次に、ビルマ語の声調がポー・カレン語にどのように対応するかを見る。ここでは、ビルマ語の三つの声調、低平調・高平調・下降調だけでなく、声調に大きく関わる現象である促音節と軽声音節についても見る。

3.4.1 低平調

ビルマ語の低平調(/à/)は、ポー・カレン語において、下降調(/â/)あるいは低平調(/à/)で受容される。(160)から(167)に下降調で受容された例を、(168)から(171)に低平調で受容された例を示す。

(160) B /tɛ?tâ/ 「楽な; 治る」 > PK /θɛθâ/ (-.-) 「治る」 [= (6)]

(161) B /tîn-/ 「載せる」 > PK /tîN/ (*#) 「(インターネットに)アップロードする」 [= (9)]

(162) B /kân káun-/ 「運が良い」 (1 パーリ語 kamma) > PK /kânkōN/ (*.*) 「運良く」 [= (15)]

(163) B /phàun/ 「いかだ」 > PK /phōN/ 「いかだ」 (-) [= (19)]

(164) B /thìn-/ 「思う」 > PK /thîN/ (#) 「思い込む」 [= (22)(119)]

(165) B /tàn bó/ 「値段、価値」 > PK /tânphō/ (*.*) 「値段、価値」 [= (32)(113)]

(166) B /tâin-/ 「通報する」 > PK /tâin/ (*) 「通報する」 [= (125)]

(167) B /hmàn-/ 「正しい」 > PK /mân/ (-) 「定刻通りの; 規則正しい」 [= (76)(128)]

(168) B /?àun-/ 「合格する」 > PK /?òn/ (-) 「合格する」 [= (16)]

(169) B /thì thó-/ 「くじを買う」 > PK /thō thî/ (*.-) 「くじを買う」 [= (23)]

(170) B /hàtâ/ 「お笑い」 (パーリ語 hāsa) > PK /hàθâ/ (#.-) 「お笑い」 [= (58)]

(171) B /nàyi/ 「時計」 (サンスクリット語 nālī) > PK /nàjî/ (-.-) 「時計」 [= (70)]

ビルマ語の低平調がポー・カレン語の下降調と低平調のいずれで受容されるかを決定する要因は、今のところ不明である。上に挙げた例では、個々の語彙が下降調と低平調のいずれで発音されるかはほぼ決まっているが、語彙によっては、下降調と低平調のどちらで発音してもよい場合がある。(172)と(173)にその例を示す。(172)のポー・カレン語形式は、/pâ/ と /pà/ のいずれでも発音される。同様に、(173)のポー・カレン語形式の第 1 音節は、/jê/ と /jè/ のいずれでも発音される³。下降調であるか低平調であるかは話者によって決まっ

³ 統計に基づいた分析を行ったわけではないので厳密ではないが、あくまでも私の印象としては、(171)は低平調を用いた /pà/ で発音されることが多いように感じる。この単語は極めて頻繁に使われる単語である。もしかすると、低平調で発音され得る借用語は、その語彙のポー・カレン語への馴染み具合が強いと言えるかもしれない。

ているわけではなく、同一の話者が同じ形式をある場合は下降調で発音し、また別の場合には低平調で発音するといったこともよく見られる。

(172) B /pà-/ 「含まれる」 > PK /pâ/ (*) または /pà/ (-) 「含まれる」 [= (5)(108)]

(173) B /yègè/ 「氷」 > PK /jêkhê/ (*.-) または /jèkhê/ (-.-) 「氷」

ビルマ語の語彙の中に低平調の連続があった場合、その語彙がポー・カレン語に借用されると、最後の音節以外は必ず低平調になる。(174)の「カレン州」を表すポー・カレン語形式を見ていただきたい。(172)や(173)と同様に、最後の音節は /nê/ と発音しても /nè/ と発音しても構わない。しかし、それに先行する音節である /jìn/ と /pji/ は低平調で発音しなければならない。

(174) B /kăyìnpjìnè/ 「カレン州」 > PK /kəjìnpjìnê/ (-.#.-) または /kəjìnpjìnè/ (-.#.-) 「カレン州」

したがって、*/kəjìnpjìnê/、*/kəjìnpjìnè/、*/kəjìnpjìnè/ はいずれも許容されない発音である。この対応は間に軽声音節を挟んだ場合にも適用される。(175)と(176)を見ていただきたい。

(175) B /wàḍānà/ 「興味」(パーリ語 *vāsanā*) > PK /wàṭəṇā/ (-.-.-) 「興味」 [= (80)(109)]

(176) B /sèḍānà/ 「誠意」(パーリ語 *cetanā*) > PK /cèṭəṇā/ (-.-.-) 「誠意」 [= (102)]

例(175)と(176)のポー・カレン語形を */wâṭəṇā/ */cêṭəṇā/ と発音することは許されない。

3.4.2 高平調

ビルマ語の高平調(/á/)は、ポー・カレン語において、中平調(/ā/)で受容される。(177)から(184)に例を挙げる。

(177) B /cáun/ 「学校」 > PK /cōn/ (*) 「学校」 [= (11)(131)]

(178) B /ká/ 「自動車」(英語 *car*) > PK /kā/ (*) 「自動車」 [= (14)(107)]

(179) B /phóun/ 「電話」(英語 *phone*) > PK /phōun/ (-) 「電話」 [= (20)]

(180) B /khédàn/ 「鉛筆」 > PK /khētān/ (-.*) 「鉛筆」 [= (26)(40)]

(181) B /béin/ 「車輪」 > PK /pēin/ (*) 「車輪」 [= (27)(124)]

(182) B /cáunḡá/ 「学生」 > PK /cōnṭā/ (*.*) 「学生」 [= (35)]

(183) B /éin-/ 「片付いている、すっきりしている」 > PK /ēin/ (#) 「すばらしい; 美味しい」 [= (52)]

(184) B /hó-/ 「(仏法を)説く」 > PK /hō/ (#) 「(仏法を)説く」 [= (56)]

3.4.3 下降調

ビルマ語の下降調(/ă/)は、ポー・カレン語において、高平調(/á/)で受容される。(185)から(192)に例を挙げる。

- (185) B /câjânânâ/ 「きちんと」 > PK /câcânáná/ (-.-.-) 「きちんと」 [= (12)]
(186) B /ʔăyâḡà/ 「味」 (パーリ語 *rasa*) > PK /ʔăjáṭâ/ (-.-.-) 「味」 [= (33)(84)]
(187) B /lâḡâ/ 「月給」 > PK /lâkhá/ (-.-) 「月給」 [= (47)(87)]
(188) B /hàṭâ/ 「お笑い」 (パーリ語 *hāsa*) > PK /hàṭâ/ (#.-) 「お笑い」 [= (58)(170)]
(189) B /shû/ 「賞」 > PK /chú/ (-) 「賞」 [= (61)]
(190) B /nauʔcâ-/ 「遅い」 > PK /náucá/ (-.-) 「遅刻する、間に合わない」 [= (69)(153)]
(191) B /lû-/ 「奪う」 > PK /lú/ (-) 「(何かを行う時間を)苦勞して作る」 [= (116)]
(192) B /eûḡín/ 「景色」 > PK /eûkhīn/ (-.#) 「景色」 [= (118)]

3.4.4 促音節

ビルマ語の促音化韻母を持つ音節を促音節と呼ぶことにする。既に 2.1 で述べたように、私は、ビルマ語の促音化韻母と共に現れる下降するピッチを下降調 /ă/ であると見なしている(加藤 2006)。3.3.15 で、ビルマ語の促音化韻母は、一般に、ポー・カレン語では高平調を伴って受容されると述べた。これはすなわち、ビルマ語の促音節はポー・カレン語では高平調を伴って受容されると記述するのと同じことである。例を(193)から(200)に挙げる。

- (193) B /míjǐʔ/ 「マッチ」 > PK /mīchǐ/ (-.-) 「マッチ」 [= (43)(138)]
(194) B /peiʔ-/ 「閉まる; 閉める」 > PK /pái/ (*) 「閉まる; 閉める」 [= (1)(139)]
(195) B /caiʔ-/ 「好む」 > PK /cái/ (*) 「好む」 [= (143)]
(196) B /sɛʔ/ 「機械」 (パーリ語 *cakka*) > PK /cé/ (-) 「機械」 [= (50)(146)]
(197) B /kaʔ/ 「(登録証などの)カード」 (英語 *card*) > PK /ká/ (-) 「(登録証などの)カード」
[= (149)]
(198) B /khauʔshwé/ 「小麦粉で作った麺」 > PK /kháuchwē/ (-.-) 「小麦粉で作った麺」
[= (152)]
(199) B /khauʔ-/ 「(木などを)切る」 > PK /kháu/ (-) 「(木などを)切る」 [= (155)]
(200) B /luʔluʔlaʔlá/ 「自由に」 > PK /lólólálá/ (-.-.-) 「自由に」 [= (159)]

3.4.5 軽声音節

軽声音節は、ビルマ語においても、ポー・カレン語においても、音韻論的に声調を持たない音節と規定することができる。ビルマ語においては、軽声音節には韻母 /-a/ しか現れない。ビルマ語の軽声音節の韻母は /-ă/ と表示する。ポー・カレン語においては、軽声音節には韻母 /-ə/ しか現れない。ポー・カレン語の軽声音節の韻母は、声調表記なしでそのまま /-ə/ と表記する。

ビルマ語の軽声音節は、ポー・カレン語においても軽声音節で受容される。(201)から(208)に例を挙げる。

- (201) B /ʔăyâḍà/ 「味」 (パーリ語 *rasa*) > PK /ʔəjáṭā/ (-.-) 「味」 [= (33)(84)(186)]
 (202) B /jǎpàn/ 「日本」 (英語 *Japan*) > PK /cəpân/ (-.*) 「日本」 [= (41)]
 (203) B /ʔăcəiʔ/ 「急所、弱点」 > PK /ʔăcái/ (-.) 「急所、弱点」 [= (54)(145)]
 (204) B /mándǎlé/ 「マンダレー」 > PK /māntǎlē/ (-.*) 「マンダレー」 [= (66)]
 (205) B /wàḍānà/ 「興味」 (パーリ語 *vāsanā*) > PK /wàṭānā/ (-.-) 「興味」 [= (80)(109)(175)]
 (206) B /ʔăyàun/ 「色」 > PK /ʔəjôn/ (-.) 「色」 [= (83)]
 (207) B /tǎreiʔshàn/ 「動物」 (パーリ語 *tiracchāna*) > PK /təráichān/ (-.#-) 「動物」 [= (90)(140)]
 (208) B /ṭăyèʔeiʔ/ 「筆入れ」 > PK /ṭəjêʔái/ (-.*.*) 「筆入れ」 [= (141)]

4 考察

以下、4.1 では、ここまで見てきたことをまとめた上で、ポー・カレン語がビルマ語の複合語を借用した際に見られる、一見特殊な音韻対応について述べる。4.2 では、ビルマ語からの借用語に見られる音素配列論的な特殊性について論じ、加えて、ポー・カレン語がビルマ語から語彙を借用する際に、固有語の音素配列論的特徴を逸脱するような対応を選択して受容している可能性を示唆する。

4.1 ビルマ語形式とポー・カレン語形式の対応

第3節で、ポー・カレン語におけるビルマ語由来の借用語と原語の音韻対応を見た。対応をまとめたのが表1である。この対応を規則と呼んでよいのかどうかはまだ分からない。しかし、全般的に見て、ポー・カレン語のビルマ語に起源を持つ借用語の音韻には、ビルマ語の音韻との間にくっきりした(clear-cut)対応関係があることが見てとれる。したがって、表1の対応が、ビルマ語からの語彙受容における音韻規則である可能性は十分ある。

表1：ポー・カレン語におけるビルマ語由来の借用語に見られる音韻対応

ビルマ語	ポー・カレン語	該当箇所
頭子音		
/p-/	/p-/	3.1.1
/t-/	/θ-/	3.1.2
/t-/	/t-/	3.1.3
/c-/	/c-/	3.1.4
/k-/	/k-/	3.1.5
/ʔ-/	/ʔ-/	3.1.6
/ph-/	/ph-/	3.1.7
/th-/	/th-/	3.1.8
/ch-/	/ch-/	3.1.9
/kh-/	/kh-/	3.1.10
/b-/	/p-/	3.1.11

/g-/	/θ-/	3.1.12
/d-/	/t-/	3.1.13
/j-/	/c-/	3.1.14
/g-/	/k-/	3.1.15
/s-/	/c-/	3.1.16
/e-/	/e-/	3.1.17
/h-/	/h-/	3.1.18
/sh-/	/ch-/	3.1.19
/z-/	/c-/	3.1.20
/m-/	/m-/	3.1.21
/n-/	/n-/	3.1.22
/p-/	/p-/	3.1.23
/ŋ-/	/ŋ-/	3.1.24
/hm-/	/m-/	3.1.25
/hn-/	/n-/	3.1.26
/hp-/	/p-/ と予測	3.1.27
/hŋ-/	/ŋ-/	3.1.28
/w-/	/w-/	3.1.29
/y-/	/j-/ が基本。ただし、部分的に /r-/	3.1.30
/l-/	/l-/	3.1.31
/r-/	/r-/	3.1.32
/hw-/	/w-/ と予測	3.1.33
/hl-/	/l-/	3.1.34
介子音		
/-w-/	/-w-/	3.2.1
/-y-/	/-j-/	3.2.2
韻母		
/-i/	/-i/	3.3.1
/-e/	/-e/	3.3.2
/-ε/	/-ε/	3.3.3
/-a/	/-a/	3.3.4
/-ɔ/	/-ɔ/	3.3.5
/-o/	/-o/	3.3.6
/-u/	/-u/	3.3.7
/-iN/	/-iN/	3.3.8
/-eiN/	/-eiN/	3.3.9
/-aiN/	/-aiN/	3.3.10
/-aN/	/-aN/	3.3.11
/-aun/	/-on/	3.3.12
/-oun/	/-oun/	3.3.13
/-un/	/-on/	3.3.14
/-iʔ/	/-í/	3.3.15
/-eiʔ/	/-ái/ または /-éiN/	3.3.16
/-aiʔ/	/-ái/	3.3.17
/-εʔ/	/-é/	3.3.18
/-aʔ/	/-á/	3.3.19
/-auʔ/	/-áu/	3.3.20
/-ouʔ/	/-áu/ または /-óun/	3.3.21
/-uʔ/	/-ó/	3.3.22
声調		

/à/ (低平調)	/â/ (下降調) または /à/ (低平調)	3.4.1
/á/ (高平調)	/ā/ (中平調)	3.4.2
/â/ (下降調)	/á/ (高平調)	3.4.3
/aʔ/ (促音節)	/á/ (高平調)	3.4.4
/ǎ/ (軽声音節)	/ə/ (軽声音節)	3.4.5

ところで、ここまで見てきた例の中には、表 1 に示した対応とは別の対応を示すものがある。それはビルマ語の有声阻害音に見られる対応である。ビルマ語の有声阻害音 /b-/、/d-/、/j-/、/g-/、/z-/ は、いずれも、ポー・カレン語の無声音に対応する。具体的には、それぞれ、/p-/、/t-/、/c-/、/k-/、/c-/ に対応する(/θ-/ が有気・無気の対立するペアを持たないことを除けば、残りのポー・カレン語の頭子音は、無声有気音と対立する無声無気音である)。ところが、下の(209)では、ビルマ語の /b-/ がポー・カレン語の /p-/ ではなく /ph-/ に対応している。同様に、(210)と(211)では、/j-/ が /c-/ ではなく /ch-/ に、(212)から(215)では /g-/ が /k-/ ではなく /kh-/ に、(216)では /z-/ が /c-/ ではなく /ch-/ に、それぞれ対応している。つまり、これらの例は、表 1 に照らすとビルマ語の有声音に対応してポー・カレン語で無声無気音の出現が予想される箇所に、無声有気音が出現しているという点で共通しており、例外的な対応に見える。これらの対応について以下に説明する。結論から先に言えば、ポー・カレン語にはビルマ語の原形に対応する頭子音が現れている。

- (209) B /tàn**b**ó/ 「値段、価値」 > PK /tân**ph**ō/ (*.*) 「値段、価値」 [= (32)(113)(165)]
(210) B /mí**j**iʔ/ 「マッチ」 > PK /mī**ch**í/ (-.) 「マッチ」 [= (43)(138)]
(211) B /hín**j**ò/ 「スープ」 > PK /hī**nch**ô/ (##.) 「スープ」 [= (44)(57)]
(212) B /lâ**g**â/ 「月給」 > PK /lâ**k**há/ (-.) 「月給」 [= (47)(87)(187)]
(213) B /yè**g**é/ 「氷」 > PK /jê**kh**ē/ (*.) または /jê**kh**ē/ (-.) 「氷」 [= (173)]
(214) B /ʔǎhlù**g**àn/ 「寄付の集金人」 > PK /ʔəlù**k**hân/ (-.-.) 「寄付の集金人」 [= (91)]
(215) B /eû**g**ín/ 「景色」 > PK /eû**k**hīn/ (-.#) 「景色」 [= (118)(192)]
(216) B /thú**z**án-/ 「奇妙な」 > PK /thū**ch**ān/ (-.) 「奇妙な」 [= (64)(117)]

これらの例のビルマ語形に共通するのは、いずれも複合語であり、問題の有声音が原形においては無声有気音を持っているということである。ビルマ語には、複合や重複といった形態操作において、後部要素の頭子音として現れた無声阻害音が有声音に交替する形態音韻論的な現象がある。具体的には、阻害音のうち、/p-/ と /ph-/ が /b-/ に、/t-/ と /th-/ が /d-/ に、/c-/ と /ch-/ が /j-/ に、/k-/ と /kh-/ が /g-/ に、/t̪-/ が /d̪-/ に、/s-/ と /sh-/ が /z-/ に交替する。例えば、/mí**b**án/ 「花火」は /mí/ 「火」と /pán/ 「花」からなる複合語であり、後部要素の /pán/ の頭子音 /p-/ が複合に際して /b-/ に交替している。(209)から(216)のビルマ語形式もすべて複合語であり、(217)から(224)の右辺に示したような要素からなる。なお、(217)(220)(223)の後部要素および(222)の前部要素に見られる /ʔǎ-/ は名詞化接頭辞であり、後部要素に現れた場合には複合に際してほぼ義務的に脱落する。

- (217) B /tàn**bó**/ 「値段、価値」 < /tàn/ 「値する」 + /ʔǎ-**phó**/ 「金額」
 (218) B /míjǐʔ/ 「マッチ」 < /mí/ 「火」 + /**chiʔ**-/ 「こする」
 (219) B /hínjò/ 「スープ」 < /hín/ 「おかず」 + /**chò**-/ 「甘い」
 (220) B /lâgâ/ 「月給」 < /lâ/ 「月」 + /ʔǎ-**khâ**/ 「代金」
 (221) B /yègǐ/ 「氷」 < /yè/ 「水」 + /**khé**-/ 「固まる」
 (222) B /ʔǎhlùgàn/ 「寄付の集金人」 < /ʔǎ-hlù/ 「寄付」 + /**khàn**-/ 「受ける」
 (223) B /eûgín/ 「景色」 < /eû-/ 「眺める」 + /ʔǎ-**khín**/ 「出来事」
 (224) B /thúzán-/ 「奇妙な」 < /thú-/ 「異なった」 + /**shán**-/ 「珍しい」

こうして観察してみると、(209)から(216)に挙げた例では、ビルマ語において形態音韻規則が適用される前の原形に対応する頭子音を用いてポー・カレン語が借用語を受容していることが分かる。すなわち、(209)を例にとると、ポー・カレン語の頭子音 /ph-/ は (217)のビルマ語 /ʔǎ-phó/ の /ph-/ に対応している。これと同様に、(210)の /ch-/ は (218)の /chiʔ-/ の /ch-/ に、(211)の /ch-/ は (219)の /chò-/ の /ch-/ に、(212)の /kh-/ は (220)の /ʔǎ-khâ/ の /kh-/ に、(213)の /kh-/ は (221)の /khé-/ の /kh-/ に、(214)の /kh-/ は (222)の /khàn-/ の /kh-/ に、(215)の /kh-/ は (223)の /ʔǎkhín/ の /kh-/ に、(216)の /ch-/ は (224)の /shán-/ の /sh-/ に、それぞれ対応している。これらの対応は表 1 に示した対応そのものである。

上の(209)から(216)は、ビルマ語における後部要素の最初の子音が無声有気音の例である。では、無声無気音の場合にはどうなるのか。(225)から(227)の例を見ていただきたい。

- (225) B /lèyìnbyàn/ 「飛行機」 > PK /lèjìnpjân/ (-.#.*) 「飛行機」 [= (121)]
 (226) B /khédàn/ 「鉛筆」 > PK /khētân/ (-.*) 「鉛筆」 [= (26)(40)(180)]
 (227) B /têdê/ 「まっすぐに」 > PK /tété/ (-.-) 「まっすぐに」 [= (10)(39)]

これらは、次の(228)から(230)に示すような要素からなる。(228)と(229)は複合であり、(230)は重複である。

- (228) B /lèyìnbyàn/ 「飛行機」 < /lèyìn/ 「航空機」 + /pyàn-/ 「飛ぶ」
 (229) B /khédàn/ 「鉛筆」 < /khé/ 「鉛」 + /ʔǎ-tàn/ 「棒状の物」
 (230) B /têdê/ 「まっすぐに」 < /tê-/ 「まっすぐな」 + /tê-/ 「まっすぐな」

これらを観察すると、(225)のポー・カレン語形における /p-/ は (228)の後部要素 /pyàn-/ の /p-/ に、(226)の /t-/ は (229)の後部要素 /ʔǎ-tàn/ の /t-/ に、(227)の 2 番目の /t-/ は (230)の後部要素 /tê-/ の /t-/ に、それぞれ対応していることが分かる。すなわち、(225)から(227)のポー・カレン語形の第 2 音節における /p-/ と /t-/ は、一見するとビルマ語の /b-/ と /d-/ に対応して現れたものであるように見え、これは表 1 の対応に合致するのだが、実際には、ビルマ語

において形態音韻規則が適用される前の頭子音である /p-/ と /t-/ に対応して現れたものであると見ることができる。もちろん、この対応は表 1 の対応に合致する。

したがって、(209)から(216)に示した対応と(225)から(227)に示した対応を統一的に説明するためには、ビルマ語形が複合語であって後部要素の最初の子音が有声阻害音である場合、ポー・カレン語では、ビルマ語の形態音韻規則が適用される前の原形の子音に対応して借用語が受容されると考えるべきである。

では、ビルマ語の形態音韻論に関する情報は、どのようにポー・カレン語にもたらされるのだろうか。これには二つの仮説が考えられる。一つめは、ポー・カレン語の話者がビルマ語の知識に基づいて原形の発音を参照していると考えられる仮説である。二つめは、ビルマ語正書法では原形の発音を残す形で綴るので、ポー・カレン語の話者がビルマ語の綴りを参照していると考えられる仮説である。私は、一つめが正しいと考える。ポー・カレン語話者にはビルマ語との二言語話者が非常に多い。このような話者は、ビルマ語の原形を知っているため、容易に原形の音韻にアクセスすることができる。二つめの仮説は、(231)に示した借用例を見ることで否定される。ロンジーというのは、ミャンマー式の腰布のことである。

(231) B /lòunjì/ 「ロンジー」 > PK /lòuncî/ (-.*) 「ロンジー」

この借用では、ポー・カレン語形の第 2 音節の /c-/ は表 1 に示した対応に則して現れている。ビルマ語形 /lòunjì/ の第 2 音節は正書法において、あたかも /chi/ という原形があるかのような綴りで書かれる。しかし、Myanmar Language Commission (1994: 458)によれば、これはヒンディー語の借用語である。この語彙は 2 音節まるごとビルマ語に借用されたのであり、/chi/ という原形はビルマ語に存在しない。ポー・カレン語形がビルマ語の正書法に基づいた発音 /lòunchî/ で受容されていない事実は、ポー・カレン語話者がビルマ語の綴りを参照しているわけではないことを物語る。おそらく、ビルマ語に /chi/ という原形が存在しないという知識に基づいてこの語彙が受容されたのだろう。したがって、私は、一つめの、ポー・カレン語の話者がビルマ語の知識に基づいて原形の発音を参照しているという仮説を採りたい。

4.2 借用語に見られる音韻の特徴

ポー・カレン語に入ったビルマ語起源の借用語を観察すると、そこには、ポー・カレン語の固有の語彙からは逸脱する音韻論的な特徴を持つものが少なくないことが分かる。固有の語彙が持つ特徴は、大きく、声調と分節音の組み合わせに関わるもの、および、分節音のみに関わるもの、の二つに分けることができる。

まず、声調と分節音の組み合わせに関わる特徴を見る。表 2 は、Haudricourt (1946, 1975) が再建したカレン祖語の声調 *1, *2, *2', *3 と現代ポー・カレン語パアン方言の声調がどのように対応するかを示したものである。詳細については Kato (2018b)を参照していただきたい。

い。*B, *M, *H は祖語の頭子音の種類である。*B は祖語における有声音、*M は祖語における無声無気音(声門閉鎖音と声門化子音を含む)、*H は祖語における無声有気音(無声摩擦音や無声共鳴音を含む)である。カレン系諸言語では、この頭子音の種類を条件として祖語の声調が分岐した。

表 2：カレン祖語の声調とポー・カレン語パアン方言の声調の対応関係

	*1	*2	*2'	*3
*B	à	ā	/	á
*M	à	á		à
*H	â	á	á	à

現代ポー・カレン語の場合、すべての方言において、*B に属していた頭子音のうち有聲閉鎖音が無声有気閉鎖音になった。また、*H に属していた頭子音のうち無声共鳴音が有聲化した。それとほぼ同時的に声調も分岐していったと考えられる。

この変化の結果、一部の頭子音と声調の間に共起上の偏りが生じることになった。具体的には、パアン方言においては、かつて*M のグループに属していた子音に由来する頭子音 /p-/、/t-/、/c-/、/k-/、/ʔ-/、/b-/、/d-/ は中平調(/ā/)および下降調(/â/)と共起せず、*H のグループに属していた子音に由来する /θ-/ は中平調(/ā/)と共起しない、という状況が生じている。

また、*M に由来する頭子音 /p-/、/t-/、/c-/、/k-/、/ʔ-/、/b-/、/d-/ と *H に由来する /θ-/ は、20 世紀中頃まで存在したと私が推定する声門閉鎖音終わりの音節との間に共起制限があった。表 2 の*3 がカレン祖語における閉鎖音終わりの音節であり、それが数十年前まで声門閉鎖音終わりの音節として残っていた。頭子音 /p-/、/t-/、/c-/、/k-/、/ʔ-/、/b-/、/d-/、/θ-/ は、高平調がかぶさった声門閉鎖音終わりの音節とは共起しなかった。このなごりが現在にも引き継がれている。すなわち、韻母のうち、/e-/、/o-/、/ai-/、/au/ という四つの韻母はかつて音節末に声門閉鎖音を持っていた韻母にのみ由来するため、現代のパアン方言でも、/p-/、/t-/、/c-/、/k-/、/ʔ-/、/b-/、/d-/、/θ-/ が韻母 /e-/、/o-/、/ai-/、/au/ と共起したとき、高平調(/á/)とは共起しない。

また、同じ四つの韻母 /e-/、/o-/、/ai-/、/au/ は、かつてあった声門閉鎖音終わりの音節が高平調(/á/)および低平調(/à/)としか共起しなかったために、現代においても中平調(/ā/)および下降調(/â/)とは共起しない。

これらの声調にまつわる音素配列論上の偏りは、あくまで歴史的に生じたものである。そして、借用語においてはここから逸脱したものが現れることがある。例えば、(15)の /kânkōn/ 「運良く」の第 1 音節では、頭子音 /k-/ が固有の語彙では共起しない下降調(/â/)と

共起しており、第2音節では、同じく頭子音 /k-/ が固有の語彙では共起しない中平調(/ā/)と共起している⁴。

次に、分節音のみに関わる特徴を見る。こちらはかなり単純である。2.2 で述べたように、頭子音のうち、/ŋ-/、/h-/、/r-/ は、モン語あるいはビルマ語からの借用語にしか見られない(/pə/ から変化した一人称複数代名詞 /hə/ を除く)。また、韻母のうち /-iN/ は、セミの一種を表す /jainjɪN/ を除けば、ビルマ語からの借用語にしか見られない。

以上が、ポー・カレン語の固有の語彙に見られる音韻論上の特徴である。分かりやすいよう、下に箇条書きにしてまとめる。(232)に示した(a)から(d)が声調と分節音の組み合わせに関わるものであり、(233)に示した(e)と(f)が分節音のみに関わるものである。

(232) ポー・カレン語固有の語彙の特徴のうち声調と分節音の組み合わせに関わるもの

- (a) 頭子音 /p-/、/t-/、/c-/、/k-/、/?-/、/b-/、/d-/ は、中平調(/ā/)および下降調(/â/)と共起しない。
- (b) 頭子音 /θ-/ は、中平調(/ā/)と共起しない。
- (c) 頭子音 /p-/、/t-/、/c-/、/k-/、/?-/、/b-/、/d-/、/θ-/ は、韻母 /-e/、/-o/、/-ai/、/-au/ と結びついたとき、高平調(/á/)と共起しない。
- (d) 韻母 /-e/、/-o/、/-ai/、/-au/ は、中平調(/ā/)および下降調(/â/)と共起しない。

(233) ポー・カレン語固有の語彙の特徴のうち分節音のみに関わるもの

- (e) 頭子音 /ŋ-/、/h-/、/r-/ を持たない。
- (f) 韻母 /-iN/ を持たない。

ここまで挙げてきたポー・カレン語形には、このような音韻論上の特徴についての情報を、記号「*」「#」「-」を使って記している。これらの意味は次のとおりである。

- 「*」：当該音節が(232)の(a)から(d)のいずれかの特徴から逸脱している。
- 「#」：当該音節が(233)の(e)と(f)のいずれかの特徴から逸脱している。
- 「-」：当該音節が(232)と(233)の(a)から(f)のいずれの特徴からも逸脱していない。

これをすべての例のポー・カレン語形の直後に記した。例えば、(2)では、ポー・カレン語形を「PK /pô/ (*)「ばれる」」のように表記している。「()」の中に入れた「*」は、/pô/ が声調と分節音の組み合わせに関して逸脱していることを表している。(3)の「PK /ʔəpāin/ (-.*)「部分」」では、「()」の中をピリオドで区切っている。これは音節の切れ目を表して

⁴ 隣接するタイ語においても、借用語では、分節音と声調が固有の語彙には見られない組み合わせを呈し得ることが知られている。具体的には、英語からの借用語で、母音の長さや声調の間に固有の語彙から逸脱した組み合わせが見られる(Gandour 1979 および Kenstovicz & Suchato 2006 を見よ)。また、2.1 でも述べたように、ビルマ語では、英語などからの借用語に、「促音化韻母と低平調」という固有の語彙には通常見られない組み合わせが現れることがある(加藤 2006)。

いる。したがって、最初の「-」は第1音節の /ʔə/ が(232)と(233)に示したいずれの特徴からも逸脱していないことを表しており、続く「*」は第2音節の /pāin/ が声調と分節音の組み合わせに関して逸脱していることを表している。(44)の「PK /hīnchô/ (##-)「スープ」」では、ピリオドの前に「##」を2個記している。これは、第1音節の /hīn/ が(233)の特徴から2回逸脱していることを表している。頭子音が /h-/ であることと韻母が /-in/ であることの計2回である。(96)の「PK /pjīn/ (*#)「直す」」に記した「*#」は、/pjīn/ が(232)と(233)のいずれの特徴からも逸脱していることを表している。具体的には、頭子音 /p-/ と下降調(/ā/)が共起している点で(232)の特徴から逸脱しており、韻母 /-in/ を持つ点で(233)の特徴から逸脱している。

このような情報を付記したのは、ビルマ語由来の借用語に、固有の語彙が持つ音韻特徴から逸脱するものが多数見られるからである。本稿でここまでに挙げたポー・カレン語におけるビルマ語由来の借用語数は、129語である(異なり数。イディオムは1語と数える)。このうち58個(45.0%)が(232)の「声調と分節音の組み合わせ」の観点でポー・カレン語の固有の語彙が持つ音韻特徴から逸脱し、17個(13.2%)が(233)の「分節音のみ」の観点で逸脱していた。うち、(232)と(233)のどちらの観点でも逸脱しているものが6個あったので、(232)あるいは(233)に挙げた特徴から一つでも逸脱しているものは、69個(53.5%)あった。なお、逸脱する発音と逸脱しない発音が可能な形式の場合、逸脱がないものとして数えた。

本稿で扱ったビルマ語由来の借用語は決して網羅的なものではないので、この数値に基づいて統計的な議論をすることはできないが、ビルマ語由来の借用語に、固有の語彙には見られない音韻論的な逸脱が多いことの見安にはなるだろう。Moreton & Amano (1999)や Kawahara & Kumagai (in press)は、特定の音素や音素配列論的な特徴が、話者が語彙層 (lexical strata)を推定することに役立つことを論じている。言い換えると、何らかの音韻論上の特徴が、語彙の由来を推定する鍵となることがある。ポー・カレン語においても、(232)や(233)に挙げた特徴からの逸脱は、ある単語がビルマ語からの借用語であることを表す印として機能していることは十分にあり得る。つまり、こうした音韻論的な逸脱は、ポー・カレン語話者が単語の意味を理解するための助けとなっている可能性がある。

4.3 声調の対応の奇妙さ

3.4で論じ、表1に示したように、ビルマ語の低平調(/ā/ [11])はポー・カレン語の下降調(/ā/ [51])あるいは低平調(/ā/ [11])に対応し、ビルマ語の高平調(/ā/ [55])はポー・カレン語の中平調(/ā/ [33])に対応し、ビルマ語の下降調(/ā/ [51])はポー・カレン語の高平調(/ā/ [55])に対応している。これは少し奇妙である。というのは、近縁言語である西部ポー・カレン語やスゴー・カレン語では、ビルマ語の声調は調値の近い声調で受容される。ところが、ポー・カレン語パアン方言では、わざわざビルマ語とは異なる調値の声調で借用語を受容してい

るように見えるのである⁵。もし調値の近い声調で受容するならば、ビルマ語由来の借用語はポー・カレン語に、(234)に示した声調の対応で受容されることになる。

- (234) (a) ビルマ語の低平調(/à/ [11]) > ポー・カレン語の低平調(/à/ [11])
 (b) ビルマ語の高平調(/á/ [55]) > ポー・カレン語の高平調(/á/ [55])
 (c) ビルマ語の下降調(/â/ [51]) > ポー・カレン語の下降調(/â/ [51])

もしこのような対応があるならば、(235)に示すとおり、例えば(166)(=(125))の「通報する」を意味するポー・カレン語形は /tâin/ (*)ではなく /tâin/ (-)という形で受容されることになり((234a)の対応)、(178)(=(14)(107))の「自動車」を表すポー・カレン語形は /kâ/ (*)ではなく /ká/ (-)という形で受容されることになり((234b)の対応)、(189)(=(61))の「賞」を表すポー・カレン語形は /chú/ (-)ではなく /chû/ (-)という形で受容されることになる((234c)の対応)。

(235) 表 1 の対応の場合	(234)の対応を適用した場合	意味
/tâin/ (*)	/tâin/ (-)	「通報する」(166)
/kâ/ (*)	/ká/ (-)	「自動車」(178)
/chú/ (-)	/chû/ (-)	「賞」(189)

問題は、借用語がなぜ(234)に示した対応で受容されずに、表 1 の対応で受容されるのかということである。それには少なくとも二つの可能性があると考えられる。一つは同音衝突の回避、もう一つは音韻論的逸脱を伴う語彙数を増やすこと、である。

まず一つめの、同音衝突の回避について述べる。(235)に示した例を用いると、ビルマ語の /tâin-/「通報する」は、表 1 の対応で /tâin/ という形で受容された場合、衝突する同音異義語は生じないが、(234)の対応で /tâin/ という形で受容された場合には、/tâin/「作成する」という単語と同音衝突することになる。同様に、ビルマ語の /ká/「自動車」が /kâ/ という形で受容された場合、衝突する同音異義語は生じないが、/ká/ という形で受容された場合には、/ká/「難しい」という単語と同音衝突することになる。ビルマ語 /shû/「賞」の借用のケースは、表 1 の対応で /chú/ という形で受容すると /chú/「とげ」という単語と同音衝突し、(234)の対応で /chû/ という形で受容すると /chû/「(水を)掛ける」という単語と同音衝突する。

同音衝突の件数が、表 1 の対応と(234)の対応とで、それぞれどれくらいになるかを試算してみよう。どちらの場合も分節音は同一と仮定する。また、促音節は声門閉鎖音が音節末に現れる点で特殊なので、(234)の場合にも表 1 に示した対応のまま高平調で対応すると見なすことにする。このように仮定し、4.2 で論じたのと同じように、本稿でここまでに挙

⁵ ポー・カレン語パアン方言でビルマ語由来の借用語の発音が元のビルマ語の発音から大きく隔たっていることは、カレン人の間で時によもやま話の話題になるほどである。

げたポー・カレン語におけるビルマ語由来の借用語 129 語を用いて、この中に同音衝突が起きるものが何語あるかを数えてみた。判断するに当たっては、私がこれまで収集したポー・カレン語のデータの中で同音衝突する単語を探した⁶。衝突が起きる単語を数えてみたところ、表 1 の対応の場合には、129 語のうち 5 語(3.9%)で同音衝突が生じ、(234)の対応の場合には、表 1 の場合よりも多く、129 語のうち 16 語(12.4%)で同音衝突が生じるという結果になった。このうち、上記「賞」を表す借用語のように、いずれの場合にも同音衝突するものが 3 語あった。本稿で扱ったビルマ語由来の借用語が決して網羅的なものではないのに加え、私がこれまでに収集したポー・カレン語の語彙もポー・カレン語の語彙全体の一部に過ぎないだろうから、この試算結果は参考に留めるのがよい。とは言っても、表 1 の対応のほうが(234)の対応よりも同音衝突が起きにくいのは確実であると思われる。

その理由は、受容側のポー・カレン語で、表 1 の対応のほうが(234)の対応よりも、音韻論的逸脱に関わる声調素が借用語彙において増えることにある。音韻論的逸脱に関わる声調素は、(232)の(a)(b)に見るとおり、中平調(/ā/)と下降調(/â/)である。(c)(d)はかつての声門閉鎖音終わりの音節に関わる対応で特殊なため、ここでは無視する。表 1 の対応では、ビルマ語の低平調(/à/)・高平調(/á/)・下降調(/â/)が、ポー・カレン語では下降調(/â/)(あるいは低平調(/à/))・中平調(/ā/)・高平調(/á/)にそれぞれ対応するため、ポー・カレン語の借用語彙に、音韻論的逸脱に関わる声調素が下降調(/â/)と中平調(/ā/)の計 2 個生じることになる。一方で、新たに仮定した(234)の対応では、ビルマ語の低平調(/à/)・高平調(/á/)・下降調(/â/)が、ポー・カレン語の低平調(/à/)・高平調(/á/)・下降調(/â/)にそれぞれ対応するため、ポー・カレン語の借用語彙に、音韻論的逸脱に関わる声調素が下降調(/â/)の 1 個しか生じないことになる。しかも、ビルマ語では下降調に比べて低平調と高平調の出現頻度が高く⁷、これに対応して、ポー・カレン語の借用語彙に音韻論的逸脱に関わる声調素である下降調と中平調が生じる。このような理由により、表 1 に示した元の対応の場合、必然的にポー・カレン語側で音韻論的な逸脱が多くなるのである。

⁶ 私は 1998 年ごろに約 3,800 項目からなるポー・カレン語語彙・用例集(私家版[134p.])を作った。それ以降、語彙データの整理が終わっておらず、それどころかデータの量は日々増えるばかりである。2024 年現在、集まった語彙の数は当時の何倍にもなっているはずだが、正確な数字はつかめていない。ただ、集めた文章や例文のデータの大半はテキストファイルの形で入力してあるため、`grep` で検索ができる。本稿での同音衝突の調査では、`grep` でデータファイルを横断的に検索してヒットした場合に、同音異義語が存在すると判断した。

⁷ 本稿で示したビルマ語形式(異なり語数)の総音節数は 210 個である。うち低平調の音節は 77 個(36.7%)、高平調は 59 個(28.1%)、下降調は 21 個(10.0%)、促音節は 38 個(18.1%)、軽声音節は 15 個(7.1%)であった。下降調に比べると低平調と高平調の割合が高い。低平調・高平調・下降調だけで見ると、総数 157 個で、内訳は低平調 77 個(49.0%)、高平調 59 個(37.6%)、下降調 21 個(13.4%)となる。また、私がデータ化したビルマ語の会話テキスト(約 1 時間)を用いて低平調・高平調・下降調の頻度を調べたところ、これら声調を持つ合計音節数 8,780 個(延べ数)のうち、低平調が 4,369 個(49.8%)、高平調が 2,456 個(28.0%)、下降調が 1,955 個(22.3%)で、やはり下降調よりも低平調と高平調の頻度が高い結果となった。

音韻論的な逸脱を生じる語彙は、歴史的に不規則な変化を遂げた語彙を除けば、固有の語彙に存在しない。そのため、音韻論的逸脱を多く生じやすい表 1 の対応のほうが、同音衝突の件数が減ることになる。

次に二つめの、音韻論的逸脱を伴う語彙数の拡大について述べる。(235)に挙げた例のうち「賞」を表す形式は、元の形 /chú/ (-)と(234)を適用した /chû/ (-)のいずれにも音韻論的逸脱が見られないが、/tâin/ (*)「通報する」と /kâ/ (*)「自動車」は、(234)の対応を適用することにより、いずれも音韻論的に逸脱する形から /tâin/ (-)と /ká/ (-)という音韻論的逸脱のない形に転ずる。このように、(234)の対応を適用すると音韻論的逸脱がなくなる例は多い。一部の形式、例えば(10)の /tété/ (-)「まっすぐに」は(234)を適用すると /têê/ (*.*)となって、「逸脱なし」から(232)の(a)の観点で逸脱する例に転ずることになる。しかし、このような例は少ない。

ここでも、本稿に挙げた 129 例の借用語を用いて、表 1 の対応の場合と(234)の対応の場合とで、音韻論的逸脱の件数がどう変化するかを見てみよう。今回もやはり、分節音は同一であると見なし、また、促音節は声門閉鎖音が音節末に現れる点で特殊なので表 1 に示した対応のまま高平調で対応すると見なした。表 1 の対応の場合には、既に 4.2 で述べたとおり、129 個の借用語のうち 58 個(45.0%)が、(232)の「声調と分節音の組み合わせ」の観点でポー・カレン語の固有の語彙が持つ音韻特徴から逸脱している。新たに(234)の対応を適用して数えてみた結果、「声調と分節音の組み合わせ」の観点で逸脱する語数は、58 個(45.0%)から 12 個(9.3%)へと大幅に減った。

表 1 の対応のほうが音韻論的逸脱の個数が多くなる原因は、先ほど同音衝突について論じた際の原因と同じである。表 1 の対応では、受容側のポー・カレン語において、音韻論的逸脱に関わる声調素が下降調(/â/)と中平調(/ā/)の計 2 個生じるのに対し、(234)の対応では、音韻論的逸脱に関わる声調素が下降調(/â/)の 1 個しか生じない。しかも、ビルマ語では下降調に比べて低平調と高平調の出現頻度が高く、これに対応して、ポー・カレン語の借用語彙に音韻論的逸脱に関わる声調素である下降調と中平調が生じるので、表 1 の対応の場合、必然的にポー・カレン語側で音韻論的な逸脱が多くなるのである。これは裏を返せば、表 1 の対応の場合、音素配列論的特徴の逸脱に照らし合わせることで借用語であると判断することのできる語彙数が増えることを意味する。

このように考えると、表 1 の対応で受容するのは、音素配列論的特徴の特殊性に基づいてビルマ語からの借用語であることを推定しやすい語彙を増やすための選択である可能性が生じる。語彙の由来に関する情報は意味の理解の助けになるだろう。

以上のように、借用語の声調が、(234)に示した対応で受容されず、表 1 の対応で受容される理由には、同音衝突を回避すること、および、音素配列論的特徴から借用語であることを推定できる語彙数を拡大すること、の二つの可能性が考えられる。私は、この両方が、借用語における、一見すると奇妙な声調の受容法に関わっていると推定する。これらのことを実証するには、借用語を今より網羅的に収集した上で、実験的な手法も取りながら証拠を積み重ねていく必要があるだろう。本稿ではこの可能性を示唆するだけにとどめ、検

証は今後の研究に俟ちたい。加えて、これらの仮説が正しいとしても、なぜ唯一の可能性ではない現行の表 1 の対応を選んだのかという謎も残る。というのも、この対応以外にも、ビルマ語の低平調をポー・カレン語の中平調で受容し、ビルマ語の高平調をポー・カレン語の下降調で受容するといった可能性もあったはずである。なぜ、低平調を下降調で受容し、高平調を中平調で受容するという対応を選んだのだろうか。この問題の解明も今後の研究に掛かっている。

5 まとめ

ここまで論じてきたことを振り返ってみよう。

ポー・カレン語がビルマ語から語彙を借用するようになったのは、東西のポー・カレン語が分岐して以降のことであり、カレン諸語の歴史から見ればごく最近のことである。しかし、現代のポー・カレン語パアン方言におけるビルマ語由来の借用語の存在は極めて大きくなっている。

ビルマ語由来の借用語は、ポー・カレン語の音韻による変成は受けているけれども、その新しさのためか、頭子音、介子音、韻母、声調いずれの要素を見ても、原語との音韻論的対応関係はかなり明瞭である(表 1)。しかし、ビルマ語の有声阻害音に対応するポー・カレン語音が通常は無声無気音であるのに、無声有気音が出現する場合がある。これを検討すると、ビルマ語で複合や重複が起きるケースでは、ポー・カレン語の頭子音は、ビルマ語で形態音韻論的操作が適用される前の音に対応していることが分かる。つまり原形の音に対応しているのであり、こうしたビルマ語の形態音韻論の情報は、ポー・カレン語話者のビルマ語の知識に基づいてもたらされると考えられる。

さらに、ポー・カレン語に入ったビルマ語由来の借用語には、ポー・カレン語固有の語彙からは逸脱する音韻特徴を持つものが少なくない。特に、声調と分節音の組み合わせに逸脱が見られることが多い。これらの逸脱する音韻特徴は、ポー・カレン語話者が語彙層を特定することに役立っている可能性がある。さらに、声調に関して、ポー・カレン語では元のビルマ語と似た調値の声調を使わず、大きく調値が異なる声調で借用語を受容していることを指摘した。これは、同音衝突を回避し、なおかつ、音素配列論的特徴に基づいてビルマ語からの借用語であることが推定しやすい語彙を増やすための選択である可能性を示唆した。

本稿では、ポー・カレン語に見られるビルマ語由来の借用語について、音韻の観点から検討してきた。ポー・カレン語には、隣接する言語であるモン語(Mon)からの借用語も、古くから現代に至るまで、多数入ってきている。モン語由来の借用語についても今後、検討する必要がある。他にも、パーリ語、英語からの借用語が存在する。ただし、パーリ語からの借用語は、モン語やビルマ語を通じて借用されることが多いように思われ、英語からの借用語はビルマ語を通じて借用されることが多いように思われる。さらに、最近ではタイ語の借用語も徐々に入ってくるようになった。ポー・カレン語における借用の問題を詳らかにするためには、これらすべてを考察の射程に入れることが望ましい。また、今後は

文法範疇⁸や意味の観点からも分析を行いたい。借用には社会的要素も大きく関わっているため、カレン人社会の変容も観察しながら研究を進める必要がある。

謝辞

ポー・カレン語のデータ収集と発音の確認に協力してくれたカレンの友人達、Saw Hla Chit、Saw Khin Maung Aye、Naw Snow Pawに感謝の意を表したい。また、借用語の音韻論についての知見を快く共有してくださった同僚の川原繁人氏に御礼を申し上げる。加えて、この論文を書く機会を与えてくださった『長田俊樹先生古稀記念論文集』編集担当の方々と長田俊樹先生に謝意を表したい。

参考文献

- Gandour, Jack (1979) Tonal rules for English loanwords in Thai. (In) Thongkum, T.L., Kullavanijaya, P., Panupong, P.V. & Tingsabadh, K. (Eds.), *Studies in Tai and Mon-Khmer Phonetics and Phonology in Honour of Eugénie J. A. Henderson*. Bangkok: Chulalongkorn University Press, pp. 94–105.
- Haudricourt, André-Georges (1946) Restitution du karen commun. *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris* 42.1: 103–11. (Reprinted: Haudricourt 1972, pp. 131–40)
- Haudricourt, André-Georges (1972) *Problèmes de Phonologie Diachronique*. Paris: SELAF.
- Haudricourt, André-Georges (1975) Le système des tons du karen commun. *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris* 70.1: 339–43.
- 加藤昌彦 [Kato, Atsuhiko] (2006) 「現代ビルマ語の借用語に見られる低い促音節」加藤重広・吉田浩美(編)『言語研究の射程』pp.103–126. 東京：ひつじ書房.
- Kato, Atsuhiko (2013) Mermaid construction in Burmese. (In) Tasaku Tsunoda (ed.) *Adnominal Clauses and the ‘Mermaid Construction’: Grammaticalization of Nouns* (NINJAL Collaborative Research Project Reports 13-01), pp.419–463. Tokyo: National Institute for Japanese Language and Linguistics.
- 加藤昌彦 [Kato, Atsuhiko] (2015) 『ニューエクスプレス ビルマ語』東京：白水社.

⁸ 本稿の議論と直接的には関係がないが、本稿に挙げた 129 個の形式のうち、名詞は 81 個(62.8%)、動詞(イディオム含む)は 44 個(34.1%)、副詞は 4 個(3.1%)だった。ビルマ語形式の後に ‘-’ を付けたのが動詞、副詞は(10)の「まっすぐに」、(12)の「きちんと」、(95)の「逆に、反対に」、(147)の「非常に」の 4 個で、残りは名詞である。今回扱った形式に限れば、ビルマ語の名詞・動詞・副詞はポー・カレン語でもそれぞれ名詞・動詞・副詞として受容されているので、この個数はビルマ語側から見てもポー・カレン語側から見ても同数である。Tadmor (2009: 61)によると、一般的に借用語の語類は名詞が動詞より多くなるという(平均すると約 2 倍)。Tadmor の研究では「名詞」「形容詞と副詞」「動詞」という 3 範疇に分けているので、単純な比較はできないが、名詞が動詞より多いという傾向はポー・カレン語にも現れている。

- Kato, Atsuhiko (2018a) Entailed and intended results in Japanese and Burmese accomplishment verbs. (In) Prashant Pardeshi and Taro Kageyama (eds.) *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*, pp. 173–192. Berlin & New York: Mouton de Gruyter.
- Kato, Atsuhiko (2018b) How did Haudricourt reconstruct Proto-Karen tones? *Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies* 49: 21–44.
- 加藤昌彦 [Kato, Atsuhiko] (2019) 『ニューエクスプレスプラス ビルマ語』 東京：白水社.
- Kato, Atsuhiko (2019a) Pwo Karen. (In) Vittrant, Alice & Justin Watkins (eds.) *The Mainland Southeast Asia Linguistic Area*, pp. 131–175. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Kato, Atsuhiko (2019b) Karen and surrounding languages. (In) Norihiko Hayashi (ed.) *Topics in Middle Mekong Linguistics (Journal of Research Institute 60)*, pp. 123–150. Kobe: Kobe City University of Foreign Studies.
- Kato, Atsuhiko (2019c) The middle marker in Pwo Karen. *Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies* 50: 21–62.
- Kato, Atsuhiko (2021a) Typological profile of Karenic languages. (In) Sidwell, Paul & Mathias Jenny (eds.) *The Languages and Linguistics of Mainland Southeast Asia*, pp. 337–367. Berlin & Boston: Mouton de Gruyter.
- Kato, Atsuhiko (2021b) Pwo Karen writing systems. *Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies* 52: 23–55.
- Kawahara, Shigeto & Gakuji Kumagai (in press) Japanese speakers can infer specific sub-lexicons using phonotactic cues. *Linguistic Vanguard*.
- Kenstowicz, Michael & Atiwong Suchato (2006) Issues in loanword adaptation: A case study from Thai. *Lingua* 116: 921–949.
- 水野弘元 [Mizuno, Kōgen] (1991) 『パーリ語辞典 <二訂版>』 東京：春秋社.
- Monier-Williams, Monier, Sir (1899) *A Sanskrit English Dictionary*. Oxford: Oxford University Press. (Reprinted in 1986; Delhi, Varanasi, Patna & Madras: Motilal Banarsidass.)
- Moreton, Elliot & Shigeaki Amano (1999) Phonotactics in the perception of Japanese vowel length: Evidence for long distance dependencies. *Proceedings of the 6th European Conference on Speech Communication and Technology*.
- Myanmar Language Commission (1994) *Myanmar-English Dictionary*. Yangon: Department of the Myanmar Language Commission, Ministry of Education, Union of Myanmar.
- 坂本恭章 [Sakamoto, Yasuyuki] (1994) 『モン語辞典』 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Tadmor, Uri (2009) Loanwords in the world's languages: Findings and results. (In) Martin Haspelmath & Uri Tadmor (eds.) *Loanwords in the World's Languages: A Comparative Handbook*, pp. 55–75. Berlin: Mouton de Gruyter.